

ΠΑΡΜΕΝΙΔΗΣ

パルメニデス

プラトン著
木村鷹太郎訳

凡例

- 本PDFは、木村鷹太郎訳『プラトーン全集』第九巻（富山書房1925訂正七版）を底本とする。
- Bernard Jowett, "The Dialogues of Plato, Vol. 4 PARMENIDES"による英訳版を訳した物である。但し他の訳書も参照したとのことである。従つてJowett訳と異なる場合、誤訳とは言えないのだが、異なりは気になる範囲で注記した。
- ・底本における漢字は新漢字に改め、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
 - ・文語体であるが送り仮名も現代的に変えた。底本に於ける平仮名・カナの踊り字（ゝゞゝ）は解消した。
 - ・底本に於ける、接続詞・代名詞などで、「若し・若」「又た・又」「是・是れ」の様に送りの不ぞろいはかなに変えたり、そろえたりした。
 - ・カナ表記を幾つか改めた、一覧を巻末に。
 - ・「一」「他」など傍点を打ったのは作成者。「他・他物」と丸囲点はすべて'the others'である。
 - ・ルビは、底本にわずかにあるが、幾つか加えた、区別はしない。
 - ・底本のレイアウトは、頁毎に二重線で全体を囲い、Jowett版にある対話者名・標題を枠の左右に書き入れている。本pdfでは、頭書だけを再現した。ステファヌス貢づけは底本では省かれているが、加えた。ただし、ギリシャ語は分からないので、前後一・三行のズレは許容範囲とされたい。
 - ・□及び頁左の脚注は、すべて作成者の挿入したものである。ギリシャ語の挿入は、英訳を対照し、Harold N. Fowler(1859-1955)のネット上に公開されている対訳を参照したものである。
 - ・訳文に対して疑問を感じた箇所では、岩波書店刊『プラトーン全集』4の田中美知太郎訳を参照した。
 - ・【*】の番号は、田中訳及びFowler対訳版に、共に付されている項番号である。

『パルメニデス』解題及び序論

「パルメニデス」篇
の性質

パルメニデスの言を借りて言わば『一般俗人は以て漫言空語と為し、また往々無益なりと思う所の術たり』『言語の太洋を泳ぎ渡る』ことたり、また『努力多き娯楽』たりとの形容は實に善く「パルメニデス」篇の性質を表せるものにして、此篇はプラトンの全著書中一種異様のものたり、形而上学の最も隱微なる抽象に關せる疑問を扱えるのみに止まらず、また一種知者の愚を示めるものにして、堅白異同【堅白同異】黑白混合の言を為し、或いは建設するかとすれば忽ちに之を引き倒し、方を変じて円となし、道理の鍵鎖は巧みに真理の觀を裝い、以て結論に達し、結論に達せば其得る所空々漠々何等の得る所なし。

且つ本篇の希臘原文中壞頽かいたいせる部分甚だ多く、為に解すべからざること少なからず。古來注釈者研究家の多くは、此篇を以て難渋不可解なりと為せり。

特に本篇に於て異とすべきは、プラトン学説中の最も重要な所の觀念説の批評せられ駁撃せられ居りてプラトンの精神と趣を異にせることなり。

また本篇中のソクラテスは甚だ彈力性を欠損し、全然他篇のソ克拉テスと性格を異にし、また本篇後半部に於てパルメニデスの対話者たるアリストテレスの如きは、殆

此篇のソクラテスの人格他篇と異なれり

偽作

ど木偶の如く、何等の哲学性を表せることなく、ただ「然り」「否」の応答を為せるのみ。また全体に於て劇曲的意匠殆ど有るなく、プラトンの他の作と異なる感なき能わざるなり。

さればプラトンの批評家中パルメニデス篇を以て偽作なりと為すものあるに至れり。ユーベルエヒの如きは其人なり。余も亦寧ろパルメニデス篇偽作論に同感を有せる者なり。ⁱ

パルメニデス篇無益の空言虚論に過ぎざるが如しと雖も、もし之を思想の練習なりと見る時は、亦価値なしにあらざるべし。

然りと雖も本篇の原文の壞頗に因ると、また其思想の虚論的、言語的にして殆ど実際事物と交渉なく、全然抽象的弁論なるが故に、一読解し得ざるもの甚だ多く、再読三読、終に何等の要領を得ざる個所少なからず。されば不可解の部は之を不可解と為し置き、ただ幾分なりとも思想の修練に得る所あるを以て満足して可なり。何となれば吾人は古書の奴隸たる可からず、枯学腐儒たる可からざればなり。

*

綱要

i 今では、プラトンの中期の作で、後期の展開へわたす作品と位置づけられている。

人に聽きし所を語れるものなり。アンチフォーンの語る所に拠れば——

パルメニデスと其門人ゼノンとは、アテナイの大祭に当りてアテナイ市に來りてピトドーロスの家に宿せり。ソクラテス此時なお青年たりしが、友人數名と共にパルメニデスの許に來りて其学説を問ひ、談論は觀念説に及び、パルメニデスはソクラテスの觀念論を以てなお若年の議論たるに過ぎずと為し、殆どアリストテレスの論法を以て之を論破し去り、かくの如きの説を為すは、畢竟するに、ソクラテスの未だ弁論術を修めざるが故なりと為し、先ず宜しく其方法の修養を為すべきを教える。ソクラテス其方法の修養を問う。パルメニデス甚だ之を以て煩なりと為し、聊か厭うの風ありしも、遂に之を諾し、談論の対手を一同中の最も若年なるアリストテレスなる者と為し、以て其説明に及ぶ、其方たるや、

先ず「一」なるものを立て、これに就いて如何になるべきかを研究するにあり。今其冗長なる記述に代えるに簡明なる表を以てせば左の如くなるべし。——

- (一) 一、有り
- (二) 一、無し

もし、一、有とせば、これ無なり。
もし、一、無しとせば、これ万物なり。

然りと雖も「有り」「有らず」は二様の意味に取らる——

一は一なりとなるか、または

一は存在せりとなるべし。

これより二個の結果生ず——

(一、ア)もし一有らば、これ無なり、

(一、イ)もし一存在を有せば、これ万物なり、

これに附属する二種の結果あり——

(一、アア)もし一存在を有すとせば凡ての他物有り、

(一、イイ)もし一は一なりとせば、凡ての他物無し。

また右同様なる区別は消極的仮定説に適用するを得べし——

(二、ア)もし一無しとせば、これ凡ての物なり、

(二、イ)もし一存在を有せずとせば、これ無なり。

他なるものに關しては二個の並行断定生ずるなり——

(二、アア)もし一無しとせば、他は万物なり。

(二、イイ)もし一は存在を有せずとせば他物無し。

*

プラトンの「パルメニデス」篇は既に死したる時代の哲学に属せるものにして、吾人の本篇に対するや、単に好古的或いは歴史的趣味を以てするものにして、そのもの哲学其物の価値に至つては、殆ど之を認め得ざるものなり。且つ吾人は、非常の困難を以て、「一」及び「存在」の観念が、哲学者の注意を引きし所の古代の人心の状態に身を投じ得たるものなり。其厳正なる言語を以て、また一種幾何学的正確を以て、かくの如き長議論を進行せしむるの技量に至つては、吾人殆ど之を歎称し、また如何なる抽象的思想も、到底パルメニデスの討議精査に堪え得ざるべしとまで思うものなり。然りと雖も、其達する所の結論や無意味の事たるなり。

此書果たしてプラトンの真書なるか。もしそれ然りとせば、何ぞ其自説たる観念論を攻撃するの鋭利なるや、また其ソクラテスの余りに彈力なき無意味の人格なるや。之を思わば吾人はパルメニデス篇の真作たるを疑わざるを得ざるものなり。

本篇著作の年月は吾人之を知り得ざるなり。またプラトンの他の著作との関係も明らかならざるなり。また本篇の内容の二部に分れ居りて、兩者間の連絡の有様は一見甚だ曖昧にして、其後なる部分なる「一」及び「存在」を論ぜるは、単に説明の例として之を謂えるものなるか、また其等を論ずるを以て目的と為せるか、これ亦不明たるを免れざるなり。而して其始の部分たる、プラトン自身の観念論の批評に至つては、

プラトンの観念説

吾人寧ろ哲学的価値の大なるを認むるものなり。

*

アリストテレス学派の誤解

ここに於てプラトンの観念説に就いての議論かかる可からざるなり。元来プラトンの観念説なるものは、果たして哲学的明瞭正確なるものなるか、否か。従来一般の人々の想う所に抛れば、大抵然りと為す所なりと雖も、^{ある}プラトンの英訳者ジョウエット【Benjamin Jowett (1817-93)】は否と為し、これプラトンの哲学に於て明瞭正確なるものに非ずして、其然るが如く思われるは、人々の想像に基づけるものなりと為す。ジョウエット氏が其理由として説く所に抛ればこれアリストテレス学派の徒がプラトンを誤解し、また其誤解を後代の「スコラ」学派の観念实在主義に由りて一層に狹隘ならしめたるものと為す。今世間一般の解せる所のプラトンの観念論を概説する時は真理個々の物に存せずして一般的のものに存し、神の心胸或いは遙かの天に其居を有す。其これに関する知識は、人間が現世界に生るるの前に啓示せらるるものにして、人間一旦此世に出づるや、個々の感受物に就いて之を記憶し出し、或いは聯想に由りて之を回復するなり。かの感覺上のものは眞の実在に非ずして、真理の関係に於ては、ただこれ影に過ぎずと謂うにあり。世界の解する所のプラトンの観念説かくの如く極めて明瞭なるが如し。これプラトンが何等か発表せんとする大觀智を、種々の言語の形

プラトンの観念説
は詩的、預言的の
発表たるのみ

容を以て詩的、預言的、神秘的に発表せし所を、一種の教説に変化せしに過ぎざるなり。されどもプラトンは決して明瞭に観念説を説ける所あるなく、其言互いに一致するなく、吾等は観念論に關して、時に神話の雲の中に入り、時に数学、形而上学の抽象中に在り、しらずしらず一方より他方に移り、また道理と想像とは、同一章句中に混交するを見る。時には観念は多数なるが如く、また善の至上の一観念中に呑没せらるることあり。時に観念は人格を有せる如く、また無人格なる如きあり。時には観念は抽象語を謂うことあり、また万物の原因なる如きあり。また時には「デモン」たり、精靈たり、此者の助力に由りて神は世界を造れりと為すことあり。また善の観念は直ちに至上の存在者として万物を造れりと為せることあり。

向上的勢力

プラトンの観念に関する言説や、かくの如くそれ異様多端にして、之を調和して一個の教説と為さんとするは、蓋し誤れりと謂わざる可からず。プラトンの観念説は比喩なり、預言なり、神話なり、徵象なり、默示なり、また未知の世界に対する渴仰にして、深厚なる宗教及び実想的感情と、不思議なる心的現象の觀察より生ずるものなり。決して学術的、論理的厳正を以て発表せるにあらざるなり。然りと雖も其種々の発表中全体に通じて瀰漫する所のものは、「理想的」精神にして、哲学の歴史上、種々の名称、種々の形態を有して現れ、最も理想主義を好まざる人にまでも、必ず或程度

の感化を及ぼせるものなり。此理想主義や往々矛盾空想の非難なきに非ずと雖も、なお能く人心を向上せしむる勢力を有し、此精神に感興する或人々には、驚くべき精神美と善の力とを与えるなり。此主義や再三三四放逐流謫るたくせられたり、然りと雖も亦忽ちに帰り来れり。時には此主義凡神論に墮落することありしも、また直ちに発顕し来るなり。其人心を興揚せしむること、他の如何なる思想も決して之に及ぶものなし。プラトンの観念論は、言論教義に非ずして、実は此精神を種々に言い表せるものなる如し。（第三卷『ファイドロス』解題及び序論中にも同様のことを言い置きたり）

『メノーン』篇に於ては靈魂の前世の存在を説き、先天的観念あることを、奴隸の小児に就いて、幾何学的方面より論じたり。

『ファイドロス』篇に於ては、靈魂が天上の大美に向つて神々の列と共に進行しここに正義、節制、大美その他の観念の智識を得ることを説けり。

『ファイドーン』篇に於ては寧ろ靈魂不死論より其前世の存在に論及し、觀念亦前世にこれ有りしを言えり。

『理想国』篇「チマイオス」篇亦諸所に観念論を為し、殊に觀念は理想的、模範的のものとして表ざるるなり。然るに――

『バルメニデス』篇に於ては、何等観念論の説明なく弁護なく、ただ其駁撃あるの

みにして、其論全々アリストテレス的なり。蓋けだしこれ偽作ならんか。

プラトンの観念説 大要かくの如し。然るに之を調和結合して一教義として言い表ざんとせば、却つてプラトンの精神を誤るものと謂うべきなり。

プラトンの観念説かくの如くそれ不明曖昧にして、其観念の起原に対し起したる問題や、また極めて幼稚なるものなりき。然りと雖も此思想は後代の哲学史上に至大の勢力を有するものたるなり。世界は往々『権威』『平等』『功利』『自由』『快樂』『経験』『偶然』『物質』『分子』『原子』或いは『エネルギー』等の如き形而上の無数の抽象語に導かることありと雖も、皆これ曖昧不明瞭のものにして、何等明瞭堅実なるものあるにあらざるなり、而もこれ等はプラトンの『観念』の如き、人生の現実々地の勢力たるものにあらざるなり。

パルメニデス

対話人物

ケファロス	ソクラテス
アデイマントス	ゼノン
グラウコーン	パルメニデス
アンチフォーン	アリストテレス
ピトドーロス	

此対話はケファロスの語る所にして、これアデイマントス及びグラウコーンの異母兄弟たるアンチフォーンがケファロスの前にて、故人のクラゾメナイ人に語りしと思わる所のものなり。

(一) 対話の発端

【1】**【ケファロス】**吾等はクラゾメナイの家よりアテナイ市に來り「アゴラ」にてアデイマントスとグラウコーンとに会えり。時にアデイマントス余の手を取りて曰く、君を歓迎すケファロスよ。何事かアテナイに於て吾等君の為に尽くし得ることあるか。
然り、余のここに來りしは其目的にして、余は者等の好意を得んとする者なり。

彼曰く、其は何事ならん。

クラゾメナイ人
等の懇望

B

余は君の異母兄弟の名を忘れたるが、余の君に求むる所は、其名を告げんことなり。余の前回クラゾメナイよりここに来りし時は、彼や小兒に過ぎざりしが、今や数年を経過せり。彼の父の名は、もし余の記憶にして誤らずとせば、ピュリラムペースにはあらざりしか。

彼曰く、然り、また吾兄弟の名はアンチフォーンなり、されども君の之を聞くは何故ぞ。

余曰く、請う余は吾国人を紹介せん。彼等は哲学を好愛する者にして、アンチフォーンはゼノンの友人たるピトドーロスなる人と親密にして、数年前ソクラテスとゼノンとパルメニデスとの間に行われたる対話を記憶し、ピトドーロスは數々之を彼に語れる由よしを聴きたり。

全く然り。
しか

余問うて曰く、吾等其を聴くを得んか。

彼に答えて曰く、之に優すぐらん容易なることあるなし。彼の青年なりし時は此種の問題に心を用いしと雖いえども、今は其思想は他の方向に馳せ、其祖父アンチフォーンと同じく乗馬に熱中するに至れり。されどもしこれ君の求むる所ならんには、吾等往ゆきて彼

対話当時の記述

を尋ねん。彼は近くのメリタに住せり。暫時以前まで此処に居りしが今しも家に帰りしなりと。

D C B 127 ここに於て吾等彼を訪問せしに、幸にして在宅して轡^{くつわ}の修復を鍛冶に命じつありき。彼鍛冶の用談を終りし時其兄弟彼に語るに吾等の来意を以てせしかば、彼余に挨拶するに余の前回アテナイに來りし時より記憶せりとのことを以てせしかば、吾等はかの対話を語り聴かさんことを懇望せり。始めは彼其意なく、甚だ其煩^{わざらわ}しきを訴え居りしも、後には遂に承諾せり。彼語りて曰く——ピトドーロス彼に告ぐるにパルメニデス及びゼノンの出現を以てせり。彼曰いけらく、彼等二人アテナ大祭に際してアテナイ市に来れりと。前者のアテナイ市に來りしは殆ど六十五歳^{たけ}の時にて、既に白髪なりしと雖も容貌高雅の人なりき。ゼノンは殆ど四十歳に丈高く立派なる人物たり、其少年時代にはパルメニデスの愛する所なりしと謂う。彼曰く、彼等兩人市壁の外なるケラミッコスなるピトドーロスの家に滞在し、ここにソクラテスは其時なお少年なりしが、他の数名と共に來りて兩人に對面を求め、以前彼等兩人が始めてアテナイ市に來りし時に持ち來りし所のゼノンの論文を聴聞せんことを求めたり。パルメニデス其時不在にして、ゼノン自ら之を彼等に読み聽かせ、殆ど読み終りし頃、ピトドーロス入り來り、彼と共にパルメニデス及びアリストテレスも入り來り、対話の残余

(二) 議論の開始
ゼノンの議論は——
存在は多たる能わ
ず、何となれば多な
りとせば其物同【*like*】か不^い同【*unlike*】かならざる可からずと雖も、これ不可能なり、

同一不同ならざる可か
らず、これは不可能
なればなり

E
を僅かに聽きたり。此アリストテレスは此後三十暴政家【三十人政權】の一人となりし
人なり。ピトドーロスはゼノンの論文は前に再読されし時に既に之を聽きし」とあり。
【2】朗讀終りし時ソクラテスは、其第一論の第一論題の再讀を要め、其再讀され
し後言うて曰く、ゼノンよ、君の意味する所や如何。君の主張する所は、もし物多【*being
is many*】ならば其物同【*like*】か不^い同【*unlike*】かならざる可からずと雖も、これ不可能なり、
何となれば同は不^い同たること能わず、または不同は同たる能わずと云うにあるか——
これ君の立場なるか。

ゼノン曰く、正しく然り。

もし不同は同たること能わず、同はまた不^い同たること能わずとせば、君の説に拠る
時は、存在は多たること能わず【*being could not be many*】。何となればこれ不可能を含有
すればなり。凡て君の言える所は、其多の存在を反証する以外何等他に目的を有せざ
るか、また君の論説の各部は各別々にこの事の証拠を供給する目的と為し、凡て
これ君が其議論を構み立て【組み立て】しが如く、多の非存在に関する多くの証明あ
るを示めせるものなるか。これ君の意味せる所か、或いは余は君を誤解したるか。

(III) ゼノンとパ
ルメニデスと学説
上の関係

ゼノン曰く、否、君は余の全体の目的は、正確に之を了解せり。
ソクラテス曰く、バルメニデスよ、ゼノンは其友情に於て單に君と一たらんと欲す

ゼノンの「多なるもの」とはパルメニデスの「万物一なり」と他の言い表したのみ

ゼノン自家の心事を明かす

B

C

D

るのみに止まらず、なおまた其著述に於いても君の第二の自我たらんとせるは余の信ずる所なり。彼は君の言える所を他の方法を以て之を表し、殆ど新規のものを語れる如く吾等を思わせんとするものの如し。君は其詩に於て万物は「一」なりと言い、之に就いて卓絶せる証明を挙げたり。然るに彼は他方に於て、多なるものなきを言い、之に就いて、彼実に他を圧倒する所の証拠を提供せり。君は「一」を断定し、彼は多を否定す。かくて君等は世間を欺きて、其实同一事を言えるに係わらず、各異なる事を語るが如く信ぜしむるなり。これ實に吾等の企て及ばざる技量なりと謂う可し。

ゼノン曰く、然りソクラテスよ。君は實に獸類の足跡を追窮するに銳敏なること、スバルタの獵犬の如しと雖も、真に此論文の動機を十分に了解せざる者にして、決して君の想像するが如き技巧を以てせるものにあらざるなり。君の言える所は單にこれ偶然たるに過ぎずして、決して大目的を名乗り、或いは世間を欺かんとするが如き、何等の深き目的あるに非ず。実を言わば、余のこれ等の著述は、ただ人々が、唯一説に向つて嘲笑戯謔ぎく【冗談】を試み、またそれより来るべしと想像する所の数多の滑稽矛盾の結果を示めさんとするの論者に対し、パルメニデスの議論を保護せんとするにあるのみ。余の答弁はかの多主義の学派に向けしものにして、彼等の攻撃に対しても、余は、もし彼等の仮定説たる多主義を貫徹せんとする時は、唯一主義の仮定説よ

E りも、なお一層に滑稽なりとの説を以て、彼等の論を逆か捩じして愉快に之に答弁せり。余の師説を奉ずるの熱心は、余を導きて、青年時代に著述せしめたり。然るに何者か其草稿を盗みたるが故に、余は其出版すると出版せざるとの選択を有せず。然りと雖も著述の動機たるや、これ大人の野心に非ずして、ただ青年血氣の事たるなり。

ソクラテスよ素よりその他の事に於ては、君の思想は余が前に言えるが如く、全く正当なりと雖も、この事は君之を知らざりしものの如し。

(四) 観念論と可視の物体

B 129

【3】ソクラテ斯曰く、余は君の言える所を了解しました之を承認す。然りと雖もゼノンよ、請うこの事を告げよ、君はなおまた進みて、同、自身の觀念あり、また他に同、絶対觀念と、それを享有せる物との相違の反対たる所の不同、**unlikeness** の觀念ありて存し、これ等両者は、君も余も、その他多なる名稱を適用する所の一切諸物の享有する所たり——其同、を享有する所の諸物は、其程度に於て同たり、不同、を享有する所の物は、其程度に応じて不同たり、或いは其両者を享有する程度に於て同、不同、を兼ねる——所の觀念ありと思わざるか。かくて万物これ等両反対を享有し、其之を享有するが故に同たると同時に不同たるを得ざるか。これ何等驚くべきことであらざる可し。今もし絶対同は同となり、絶対不同と

i 「自身」は *likeness in itself* で、「觀念」は英訳ではほとんどが *ideas* だが、原著はエイドスである。
ii 「享有」、時には関与とか訳されるが、英訳では *partake* 所有（共有・分有）する||分取する。

C

D

不、不同たるべき」と【絶対的な類似が非類似になること、あるいは絶対的な非類似が類似すること】を証明し得べしとせば、余の意見を以てする時は、これこそは驚くべきの事たれと為す。然りと雖もゼノンよ、かのただ物が同、不同を享有する所のものは、両者を経験する」とを証明するに於ては、何等方外の事あらざるなり。且つ、人もし「を享有するに由りて万物は一たり、同時に多を享有する由りて多たりとの事を証明せんとせば、これ真に驚くべきことたるべし【事ではないでしようⁱⁱ】。然るに彼もし余に証明するに絶対ⁱⁱⁱ一は多たり、絶対多は一たりとの事を以てすとせば、余は真に驚愕せざるを得ざるなり。その他凡て皆かくの如く——かの諸性質及び觀念其物^{そのもの}が、これ等反対の性質を有せりとのことを聞くとせば、余は之を驚く者なりと雖も、人もし余に証明するに、余の多たると同時に一たりとの事を以てせんとせば、余は敢て驚かざるなり。其彼が余の多たることを証明せんとするや——彼、余の左側右側を有し、前面背面を有し、上部下部を有せることを言うべし。何となれば余は多なるものを享有せるを否定すること能わざればなり。また一方余の一なるを証明せんとせば、彼は、ここに集合せるは七人にして、余は其一たり、一を享有せるものなるを言わん。これ等両者の場合に

i "the absolute like to become unlike, or the absolute unlike to become like." --Jowett, p.48
 ii 「文ば、"Nor, again, if" 始まり、"I should be truly amazed." と受けたのだから。
 iii "absolute one" と英訳われてゐるが、絶対といふ語ではなく、田中訳「まさに一であるもの」

於て彼善く之を証明すべし。之と同じく人もし木たれ石たれその他の物は多たると共に、一たることを証明せば、吾等承認するに、彼は一と多との併存を証明せることを以てすと雖も、彼は未だ多の一たり、或いは一の多たることを証明せず、彼逆説を言えるに非^{あら}ずして、自明の事を言える者なり。然るに今しも余の暗示せしが如く、人ありて同、不同、一、多、静、動及びその他同様なる觀念を抽象し、以てこれ等は其内に混合と分離とを許すものなるを証明せんとするあらんには、余は甚しく之を驚く。ゼノンよ、此部分の議論は、君は精神込めて論ぜし所なるが如しと雖も、前にも言える如く、道理に由つて理解さる所の觀念其物に於て、君がかの目以て視るべき物体に於て証明し得ると同様なる錯乱 [*anopian*: アポリア]、混交あるを發見する者ありとせば、余は遙かに驚愕せざる可からざるなり。

【4】ソクラテスかく語りつつありし時、ピトドーロスの思う所に拠れば、パルメニデス及びゼノンは、全く其議論を喜ばざるものなりと。然りと雖も彼等なお綿密なる注意を致し、数々互いに顔見合せて、恰も彼を称賛するが如きの微笑を洩らせり。ソクラテス論じ終りし時、パルメニデスは次の語を以て其感情を表したり——
彼曰く、ソクラテスよ。余は君の精神の哲学に傾向せるを称賛す。請う余に告げよ、

これ君の以て、觀念の本件と、其觀念を享有する所の諸物との區別なりとする所なるか。君は同の觀念は吾等の以て、同と為す所のもの以外に存すと為し、またゼノンが謂いし所の、一も多もその他の諸物亦然りと為すか。

ソクラテス曰く、余はかくの如き諸觀念ありと信ず。

パルメニデス進み論じて曰く、君はまた正義【δικαιοία】、美【καλόν】、善【ἀρεθεῖον】及び凡て此種類のものの絶対觀念ありと為すか。

彼曰く、然り。

君は人間の觀念【ἀνθρώπου εἴδος】なるものは、吾等及びその他凡ての人類以外にこれ有りと為し、火も水も亦然りと為すか。

パルメニデスよ、其等の物を含ますべきか否かに就いては、余は数々不決定にてありたり。

ソクラテスよ、君はまた、言わば微笑を喚起すべき所の諸物——即ち頭髪、坭土、塵埃、その他微細卑陋なる物に就いても、同じく未決定を感じるか。君はこれ等諸物は、皆各吾等の接する所の現実の物より離れて、別に其觀念ありと為すか否か。
ソクラテ斯曰く、決してこれ無し。目以て見るべき物は、吾等に觀ゆる如きの物に拡張することを恐る

i 「觀念の本件」 "ideas in themselves" 田中訳「形相それ自体」

ソクラテス・パル
メニデスに戒め
らる

E

して、余もし其等に何等の観念ありと為さば、不合理たるを恐る者なり。余や時に此問題に昏惑し【昏惑 disturbed by 悩ます】、観念なき物有ること無しと考え始めんと為せしことあり。然りと雖も再び此位置を取るに於ては、余は之を遁走し去れり。何となれば余は無意味の無間地獄に陥りて滅びざる可からざればなり。かくて余は今しも語りし如き観念説に立帰り、之を以て余の主義と為せり。【and occupy myself with them. に立帰り、それに専念しようと思う。】

パルメニデス曰く、然り、これ君がなお年若きが故なるのみ。もし余の見る所にして誤らずとせば、一旦時來りて哲学は一層強固に君を捕えるに及びては、君は決して下等卑陋の物をも、之を輕蔑すること無きに至らん。君の現在の年齢に於ては、君は余りに多く世人の意見を顧慮するの傾向あり。【5】然りと雖も君はここに或観念なるものありて、万物之を享有し、其等は其名称をこれより得受し、例え同の同たるは、同の觀念を享有するが故たり、大なる物の大なるは大の念観【觀念】を享有するが故たり、正義なるもの、美なる物の、正義たりまた美たるは、其正義と美とを享有するが故なりとの事を意味せるかは、余の知らんと欲する所なりとす。

ソクラテ斯曰く、然り、これ余の意味する所なり。

然らば各個物は觀念の全部或いは觀念の一部を享有するか。その他に享有の方法あ

全体の觀念は同時
に各異なる物に存す
し得ず

りや如何。

彼曰く、他にあることなし。

然らば君は、全体の觀念は一たり、然るに一たりつとも各多数の一の中に存すと為すか。

ソクラテス曰く、パルメニデスよ、何故に然り得ざる。

何となれば一たり、同一たる物は、多数の別離せる各個物中に、同時に全体として存することとなり、其物自身より分離せる状態にある可ければなり。

否。然りと雖も觀念は宛かも、日が多数の場所に於て同時に一たり同一たるも、而も其物自身の状態に於て存続せるが如し。此方法を以て各觀念は同時に万物に於て一たりまた同一たるなり。

ソクラテスよ、余は君が、多数の場所に於いて同時に一たらしむる方法を愛す。君の意味する所は、余もし白帆を拡げて数人を覆うとせば、ここに多数を包含する所の、全体あるべしとのことを意味せるか。これ君の意味せる所にあらずや。

余は然りと信す。

君は以て、全体の帆は各一人を覆うと為すか、或いは其一部分のみは、人々の異なる部分を覆うと為すか。

C

131-B

後者なりとす。

果たして然らばソクラテスよ。観念其物^{そのもの}は之を分解するを得べく、観念を享有せる所の諸物は、ただ觀念の一部を享有するのみにして、其等各個に存する所の觀念は、全觀念にあらざるにあらずや。

推論上然らざる可からず。

然らばソクラテスよ、君は、一、觀念は現に之を分解するを得べく、而も、一として存すと言わんとするか。

彼曰く、決して然らず。

今もし絶対大を分解して、数多の大なる物に就いて謂わんに、其等各個は絶対大よりは小なる所の大の一部分を有するが故に、大なりとは——これ考え得べき事なるか。さればこれ亦不合理なればなり。物は大、同、小なる所の大の一部分を附加する部を有するが故に、大なりとは——これ考え得べき事なるか。

物もし、絶対同等よりは少程度の同等觀念の一部を有する時は、果たしてその部分を有せるの理由によりて、或他の物と同等たるべきか。
能わざるなり。

また仮定して、吾等の内の或者一小の一部分を有すとせんか。これただ一小の一部分なるが故に、絶対小はこれよりも大なるべし。もしそれ絶対小は比較上大なりとせば、り

D

また物は觀念の部分のみを有すること能わず、何となればこれ亦不合理なればなり。物は大、同、小なる所の大の一部分を附加すること能わざるなり。

かの小の部分の加わりし物は以前よりもなお小たるべく、決して大たらざる可し。

如何にも不合理なるかな。

然らばソクラテスよ、物もし部分としても、或いは全体しても、観念を享有すること能わざとせば、如何なる方法を以て観念を享有すべきぞ。

彼曰く、実に君は容易に答弁すべからざるの疑問を提出せりと謂う可し。

パルメニデス曰く、それ然り、然りと雖も君は他の問題は以て如何と為す。
如何なる問題なるぞ。

觀念は抽象に由て
得

おもに君が各種類の一観念を得るよう導かれたる方法は次の如くなるべきか——乃ち、数多の大なる物体を見て、其等を觀察する時は、凡て其等の中に一の同一観念（或いは性質）存せるを知る可く、ここに君は其大たることの一なることを概念するなり。ソクラテス曰く、真に然り。

されど一般と特殊とは共にまた新觀念を作り新觀念と其特殊物とはまた他的新觀念を作り無限たるべし。

然るが如し。

ここに於て今や他の大の觀念は、絶対大及びそれを享有する所の各個物の、上に超

觀念は思想のみ
存すとの説はパル
メニデス之を排斥
す

B

越して出現し、次にまた凡てこれ等の上に超越せる他のものは出現し、それを享有して凡て大なるべく、かくて各觀念は一たらずして無限の多数たるべきなり。

【6】ソクラテス問うて曰く、然りと雖もパルメニデスよ、觀念【ειδος】はただこれ思想【νόημα】のみにして、吾等の心意以外固有の存在を有し得ざるものなるか。もしそれ然りとせば觀念はなお一たるを得べく、此無限の增多を経験せざるを得べし。
何物をも考へざる所の各個の思想なるもの存するを得るか。
彼曰く、存し得ず。

思想【thought ノエマ】とは或物の思想にあらずや。

然り。

或物とは、存在せる物なるか、存在せざる物なるか。

存在せる或物なり。

其物とは単独なる或物にして、思想はそれを万物に存する所の或一個の形状或いは性質【being a single form or nature】ⁱⁱとして認むる所のものなるか。

然り。

C

i 'thought of nothing': "νόημα δὲ οὐδένος" 田中訳「觀念【ノエマ】に対応するものがない」所の……
ii)の部分は原著では"οὐσίαν ἕνα," 田中訳「何か一つの容相」。Fowler 訳 "being one idea"

其、万物に於いて、一たり同一たりと理解さる所の或物は、観念にはあらざるか。
然り、他に遁る可きよう無し。

(七) 観念の種々
の説明

D

パルメニデス曰く、然らば、君もし物は皆観念を享有すと言わば、君はまた、物は皆思想より成立し、万物皆思想すと言ふか、然らざれば其等は思想なりと雖も、何等の思想をも有せずと言わざる可からざるにあらずや。

パルメニデスよ、後者の見解は前者よりも合理に非ず。余の見る所を以てすれば観念は自然に定まれる模型にして、その他の諸物は其等に等しく、其等の類似たり——物が観念を享有すとは、要は其等に同化【assimilation 同一視】することなり。

彼曰く、然りと雖ももし各個物は観念の如しとせば、苟も各個物は観念の類似たる以上は、観念はまた各個物の如しと謂わざる可からざるにあらずや。かの同じきものは同じきものに同じきと思うの外他にせん方これ有るなし。

然り。

もし二物同様なりとせば、其等は同一観念を享有せざる可からざるにあらずや。

然り。

かの二物の享有する所、また其等をして同一と為す所のものは観念其物そのものにあらずや。

E

i Jowett 訳は「」だが、Fowler 訳は "That is quite unreasonable, too," 田中訳 「理屈に合わない」と

然り。

然らば観念は各個物と同しき^{マサ}こと能わざず、各個物はまた観念と同しき^{マサ}こと能わざるなり。何となれば其等もし同じとせば、或他の同の観念は常に出現し来るべく、其物もし他の或物に同じとせば、また他の観念出現すべく、もし観念は、それを享有する所の物に類似すべしとせば、新観念は常に出現すべきにあらずや。

全く然り。

果たして然らば他の諸物が類似に由りて観念を享有すとの説は、ここに之を放棄して、別に他の享有法を考察せざる可からざるにあらずや。

然るべきが如し。

ソクラテスよ、君は観念の絶対たるを断定する事の困難の如何に大なるかを解せざるか。

實に然り。

且つ余は言わん、君の今まで知れる所の困難たるや、——君が物毎に単独なる観念ありと為し、これを物より離すことに由りて起る所の困難の單に小部分たるに過ぎれ

i "affirming the ideas to be absolute?" Fowler 訳は "ideas are separate, independent entities?" 田中訳 「種目 (形相) をそれ自体がそれ自体で (独立に) 存在するとして、もし誰かが規定するなら」

るなり。

彼曰く、如何なる困難なるべキ。

困難は少なからずと雖も、其凡ての内の最大なるは乃ちこれなり——もし反対論者にして、これ等の觀念は、吾等の謂えるが如く當に、其如く然るべきものにして、吾等の知り得ざるものとして存せざる可からずと論じ、また何人も彼の誤謬たることを証明し能わざとせば、かの觀念の存在を否定する人は、大手腕と大知識とを有して、長大精密なる証明を厭わざる人にあらざるよりは、彼未だ説得せらるること無く、なお觀念は知られ得ざるものなることを主張すべし。

ソクラテス曰く、パルメニデスよ、君の意味せる所如何。

ソクラテスよ、第一、余は思うに、君を始めその他何人たりとも、絶対実在の存在を主張する者は、其等は吾等人間中に存し得ざることを承認すべし。

ソクラテス曰く然りもし人間中に存せりとせば、已にこれ絶対にあらざればなり。

(八) 觀念の遊離
或いは絶対存在の
不可能

觀念はもし吾等の内に在りとせば、これ既に絶対に非ず。もし吾等以外に在りとせば觀念及び其類似は吾等の事物には自体が自体に於いてあるようなり方(本質)がある」

D

C

i "the existence of absolute essences," Fowler 訳 "an absolute idea of each thing," 田中訳「それぞれの事物には自体が自体に於いてあるようなり方(本質)がある」

なりとも、吾等人間の範囲内に在る所にして、またもし其等を享有する時は、種々の名称を受くる所の物とは、毫も関する所に非ず。また吾等の範囲にありて、其等と同なる名称を有せる所の物も、亦相互に關係あるのみにして、其等と同一名称を有せる所の觀念に關することなく、ただ其等自己のみに屬し、決して觀念には属せざるなり。

ソクラテス曰く、其意味如何。^{いかん}

パルメニデス曰く、余の意味する所はかく説明せんか——主人奴隸を有せり。然りと雖も此れ彼等の關係上何等絶対なるものあることなく、単に一人が他人に対する關係あるのみ。然りと雖もここにまた抽象上主人と謂える觀念ありと雖も、これ抽象上の奴隸の觀念に相関のことたるのみ。これ等の觀念は毫も吾等に關することなく、吾等も亦其等に關することなく、其等はただ其等自身と相關係し、吾等は、吾等自身と關係するのみ。君余の意味を解し得たるか。

ソクラテス曰く、然り、余は十分君の意味を解し得たり。

【7】知識 [ér̄oríjūn] エピステマ——余は絶対知識を意味す——これ絶対真理に

i 「絶対真理」を Fowler 訳は 'abstract or absolute truth'、田中訳は「まさに真であるところの、かの
自身としての真に」。「真」は 'ákthetia'

対応せざるか。

然り。

各種の絶対知識は各種の絶対存在に対応するか。

然り。

然りと雖も吾等の有する知識は、吾等の有する真理に対応し、また吾等の有する各種の知識は、吾等の有する各種存在物の知識たるにあらずや。

然り。

吾等の有する真理は吾等の有する真理に対応し、また吾等の有する知識は吾等の有する真理に対応し吾等は絶対の知識は之を有せざるなり

然り、有し得ざるなり。

また、絶対性質或いは種類なるもの【the absolute natures or kinds】¹は、知識の絶対観念に由つて、種々に之を知らると為すか。
然り。

吾等知識の觀念は未だ之を得ざるにあらずや。

¹ Fowler 訳 "the various classes of ideas" 田中訳「類そのものであり、そのまゝにそれぞれである」といふのもの」

然り、未だ之を得ず。

果たして然らば吾等は毫も觀念に就いて知る所なし、何となれば吾等は絶対知識に
関与せざればなり【we have no share in absolute knowledge?】ⁱ。

然り。

然らば美の本体、善の本体、及びその他吾等の以て絶対に存在せりと為す所の凡て
の觀念【idea】ⁱⁱは、皆吾等に知られるものにあらずや。

然るが如し。
おも

意うになお一層奇態の結果生ずる如し。

何ぞや。

君は言うか、はた言わざるか——もし絶対知識なるもの存すとせば【if there is such a
thing】ⁱⁱⁱ、其の吾等の知識よりは一層正確なるものならざる可からず。美及びその他に
於ても亦然り。

然り。

i Fowler 訳 "we do not partake of absolute knowledge."¹ 田中訳「知識をそれ自体として分有する」と
をわれわれがしていない以上はね」田中脚注では、いりの「分有partake」の用法は他と異なる。
そこで「自体としての分有」の意と取つた、と。
ii 訳文の「觀念」と原著のこの語とは直訳的に対応しているとはいえないが、入れておく。
iii ここに明示的には訳出されていないが、「έποντες έπαρτημένοι」「知識の類」というものがあるとすれば

他の反対論——神もし絶対知識を有せりとせば人事の知識を有する能はず、何となれば両者は各其範囲を異にすればなり

D

またもし其如き絶対知識の享有なるものありとせば、此最も正確なる知識を有せるは、何人たりとも神に優れるは無かるべきにあらずや。

然り。

然らば、絶対知識を有せる所の神は、また人事上【human things】の知識を有せるか。何故に有せざる。

パルメニデス曰く、ソクラテスよ、其理由たるや、吾等既に承認すらく、觀念は人事に関して有効なるものに非ず【not valid in relation to human things】、また人事の觀念に対することも同様にして、各両者の關係する所は、各其範囲のみに限ればなり。

然り、この事既に承認せる所。

故に神もし此完全なる権威と、完全なる知識とを有せりとするも、其権威は吾等を支配すること能わず、其知識は吾等或いは人事は之を知ること能わざること、恰も吾等の権威は神々にまで及び能わず、吾等の知識は神々の事を知り得ざるが如し。かくて同一なる道理に由り、彼等は吾等の主人にして、人事に関して知る所あらざるなり。ソクラテ斯曰く、確かに然り。然りと雖も知識を神より取り去るとは、これ奇怪な

E

i Fowler 訳 "not relative to our world," 田中訳「そのもつてゐる効力をわれわれのところにあるものに対してもつてゐるのではない」と、」

りと謂う可し。

パルメニデス曰く、ソクラテスよ、これ等は吾等の有する少困難たるに過ぎざるなり。吾等もし、観念 [idea] は実在せりとなし、各其等は絶対一のものなり [each one of them to be an absolute unity] と決定するに於ては、なお多くの困難ありて存す。かの観念に反対して論じ得べき所を聽く者は、観念の存在を否定すべく、もし観念は存在せりと為すも、これ必然上人間に知らるべきものに非ずと為し、彼また自家の道理を有せるものの如く、之を説得するは甚だ困難の事と為す。人は其各種の物が階級 [class 類] あり、また絶対実在 [absolute essence 本來的な在り方] を有せりとのことを学び得るの前には、多大の能力の天賦を有せざる可からず。また凡てこれ等の物を自ら発見する人は、なお一層に顯著なる人にして、十分其等を研究したる後、始めて之を他人に教え得べきなり。

ソクラテス曰く、パルメニデスよ、余は君に同意す。また君の云える所は大いに余の意を得たるものなり。

パルメニデス曰く、然るにソクラテスよ、人もし注意をこれ等及びその他同様なる

i Fowler 訳 "each of them is an absolute idea." 田中訳「各種目（形相）について、それを何かそれ自身においてあるものゝ」。一文中にイデアとエイドス（二語）が混ざる例。

C

難問に致す時は、物の觀念なるものは之を放棄し、かの凡ての各個物は其物自己に一定せる所の觀念を有して、常に一たり同一たりとのことを承認するなく、其心意の休み得る所の何物をも有すること無かるべく [he will have nothing on which his mind can rest] 承認しないなら、その人は、心の拠り所を何も持たないでしょう。かくて彼全然道理の力を破壊し去ること、君が特に余に於て見たるが如く為すべし。

彼曰く、真に然り。

【8】然らば哲学は如何いかにとなる。觀念もし知らるべきものに非ずとせば、吾等何

れにか帰向すべき。

余は實に目下如何にすべきかを知らず。

パルメニデス曰く、意おもうにソクラテスよ、これ君が未だ十分の預修【予習】なくして、
クラテスは未だ弁べんを
論術に熟せざるを
謂う

D

早くも以て美、正、善及び觀念一般を説明せんとするより起りたることなりと。一昨日君が此處にて、君の友人アリストテレスと論談するを聴きし時、余は君の未熟なることを知れり。君をして哲学に向わしめし所の動機は、確かに高尚神聖なりと雖も、ここには技術なるものありて、俗人等は之を懶惰らんだの談論と称し、また往々無益の事なりと想像する所なりと雖も、君は此技術を練修せざる可からざるなり。而して君やなお年若し、然らざれば真理は君の手より脱走し去らん。

パルメニデスよ、君が推薦する所の此練修の性質や如何。

これ君が、ゼノンの修むる所なりと聞きし所のものにして、同時に余は、君がゼノンに語るに、其可視の物体に関する疑惑は之を試験せんとする所に非ず、また其方法を以て此問題を考究せんとするものにも非ずして、ただ思想上の物、及び所謂觀念に關してのみ試験せんと言いし所は、之に信用を与える者なり。

彼曰く、然り、これ余に取つては、此方法を以てする時は、かの可視物は同たりまた不同たり、また如何なる状態なりとも之を経験し得ることを証明するは、毫も困難あらざる如く思われしを以てなり。

(一〇) 一及び多を
適用する結果の考
究

パルメニデス曰く、
或物の非存在及び
存在の結果を考え
るを要す

パルメニデス曰く、全く然り。然りと雖も余の意おもう所を以てすれば、君はなお一步を進めて、単に其既与の仮定説より流出する結果のみを考究するに止まらず、なおまた其仮定説を否定するより生ずる所の結果をも考究せざる可からず。これ君に取つては一層有益なる練修たる可し。

彼曰く、君の意味せる所如何。

余の意味する所は、例えば、多に関するゼノンの此仮定説の場合に在つては、君は單に多の存在の仮定上、多がそれ自身に關し、また一に關する所、一がそれ自身及び多に關する所の結果如何を研究するのみに止まらず、なおまた反対の仮定に於て、一、

B

C

及び多ⁱが各それ自身及びそれ相互に關する所の結果をも研究せざる可からずと言うにあり。またもし、同【likewise】の存する時、或いは存せざる時は、各これ等の場合に於ては、仮定説の目的物【subjects of the hypothesis】及びその他の諸物の、其等自身及び其等相互両者の關係の結果は如何なる可きかを考えるを要す。その他不同【unlikenessに就いても】、運動、静止、生産、破滅及びなおまた存在、非存在に就いても然り。換言せば君もし或物は存せり、或いは存せずと為すか或いは或方法に於て影響せられて存せりと思う時は、君は其物^{そのもの}自身及び何物なりとも君の選ぶ所の他の物との關係——乃ち各其等単独に、一以上に、また凡てに有する關係を考えざる可からず。かくてその他^{マダ}の物に於ても、君もし完全に自己を修練し、また眞の真理を知らんと欲せばく、其等が其等自善身【themselves それら自身】に有する關係、及び君の以て【you suppose 君は前提として】関係ありとするか、或いは無しとする【to be or not to be】所のその他の物をも考えざる可からむるなり。

パルメニデスよ、君の謂える所は、實に驚くべき事業にして、余は十分に了解せざるなり。請う君或仮定説を作り、一步二歩に進行せんことを。然らばなお善く理解す提ⁱ Fowle^r訳は直接の対応はしないが、what will happen to the things supposed"、存在・非存在の仮定(前提)として置かれた当のもの。

其方法の例を示せ

(一一) パルメニ
デスの方法説明

パルメニデス始
め意なかりしも
人々の懇望に由
りて説き始む

ることを得ん。

D

ソクラテスよ、これ實に余の如き老齡者に取つては重大なる事業なり。

ソクラテス曰く、然らばゼノンよ、君は幸に之を説明するか。

E
ゼノン微笑を以て答えて曰く——吾等之をパルメニデス自身説明せんことを懇願せん。君は未だ彼に課せんとする所の事業の範囲を知らざるものなりとのパルメニデスの言は至当の事なり。もし吾等ここに多数ならんには、余は之をパルメニデスに願うこと無かるべし。何となればかくの如きの問題は、特に彼の老齡を以てしては、多数の聴衆の前に立ちて語り得べきものに非ず。人間の多数はかく万事に就いて迂回曲折して進行することは、心意が眞理及び知慧に達し得る所の唯一の方法たるを知らざるなり。故にパルメニデスよ、余はソクラテスの懇願に賛成しました余も久しく聴かざりし所の方法を、今ここに再び聴くことを得んか。

【9】ゼノンかく語りし時、アンチフォーンの言う所に拠ればピトドーロスは、自己及びアリストテレスを始めとし、来会者尽く、パルメニデスが其方法の例を示めさんことを懇願する由を告げたりと。パルメニデス曰く、余は否み能わずと雖も、あた宛かもイビュコスが其老年に至り、自意に背きて恋愛に陥りしことを、自ら譬えるに馬車競走を駆けざる可からざる馬を以てし、其平素熟知せる所の距離に慄ふ【shaking with

137-B

震える】が如しと為せるに等し。余も亦此老年を以てして、言語の大海上を泳ぎ渡らざる可からざるを想う時は、同じく戦慄なきを得ざるを知る。然りと雖もゼノンの言えるが如く、吾等に義務あり、且つ吾等少人数のみなれば、余は君を満足せしむべし。然らば何れの点より始むべき。もし此多勞なる娛樂を企つるに於ては、吾等の第一の仮定説は何なる可きぞ。余は自ら始め、余自己の一に關する仮定説を選び、一の存在或いは非存在の思想より生ずる所の結論を考究することと為さんか。

ゼノン曰く、願わくは其如く為さんことを。

彼曰く、余に答えるには誰なるべき。余は此内の最少年を指名せんか。彼困難あること無く、其思う所は憚らずして之を答えるべく、其答弁は、以て余に息続ぎの時間を与えるべけん。

アリストテレス曰く、パルメニデスよ、余は君の意味せる所のものなり。余は最も

少年にして君の用に役すべし。請う問う所あれ、余は答えるべし。

【10】パルメニデス進み言うて曰く、——今もし一存すとせば、一は多たること能

わざるにあらずや。

わざるにあらずや。

然らば一は部分を有し能わず、また全体たること能わざるべし。

【以下は
パルメニデスと
アリストテレス】

C

何故に然らざる。

何となれば凡て部分なるものは全体の部分たればなり。然ずや。

然り。

全体とは何ぞや。何れの部分をも欠如せざる所のもの、これ全体にあらずや。
然り。

然らば、一は部分より成立すとするも、また全体なりとするも、何れの場合も「
部分を有せるにあらずや。」

確かに然り。

其両者何れなりとするも、「は多にして、一たらざるにあらずや。」

真に然り。

然りと雖も、「は確かに、一たるべく、決して二たる可からざるにあらずや。」
【But, surely,
it ought to be one and not many?】

当より然らざる可からず。【It ought, ええ、そうでなければなりません】

果たして然らば、「もし、一として存せんには、一は全体たらず、また部分を有せざ
るべし。」

然り。

D

(—III) 「もし部分を有せざとせば始も無く、中もなく、また終も無かるべし。
分ありとせば結果如何
部分なき故に始、
中、終、定形なし

然りと雖も、「もし部分を有せざとせば始も無く、中もなく、また終も無かるべし。
何となればこれ等は勿論その部分たる可ければなり。

正に然り。

然らばまた始、終は物の定限【limits】なるか。

然り。

然らば一は始なく終なく、無定限なる【unlimited】か。

然り無定限なり。

E
是故にまた形も無かる可し。何となれば「此円形或いは直線たる」と能わざればなり。

然りと雖も何故なるべ。

円形に非ず直線に
非ず
然り。

何となれば円形とは凡ての終極点は中心より同一距離のものたればなり。

直線とは中央が両端を横断せるものなればなり。【And the straight is that of which the centre intercepts the view of the extremes? 線分とは、中点が両端からの視界を遮るものである。】

真に然り。

i Fowler 説(も)いの順だが、原著は、始まりもなく終りもなく、中間もなく、の順である。

もしそれ、「一」が直線或いは円形を有すとせば、「一」は部分を有して多たるにあらずや。

確かに然り。【Assuredly】

然りと雖もその部分を有せざるが故に、直線にも非ず、または円形にもあらざるなり。

然り。【Right.】

^{それ}かくの如きの性質なるが故に、「一」はまた場所を有さざる可し。何となれば「他」に於て、または自己に於て存すること能わざればなり。

何故に然るか。

其理由たる、もしこれ他に存在すとせば、其在る所の物にⁱ周縁せらるべき。必ずや多くの場所に於て、多くの部分を以てそれに接觸すべし。然りと雖も苟も一たり、分ⁱⁱ解すべからざるものたり、また円形の性質を有せざるものは、其周囲に多くの点に於て接觸すべからざるなり。

然り。【Certainly not】

然るにもし他方、「一」はそれ自身の内に存すとせんか、これ他の何物にも非ず、ただⁱ「場所を」と訳していふが、"it cannot be in any place," Fowler 訳は "it cannot be anywhere," 田中訳は、「どこにも存在しない」とになるだろⁱⁱ。」
ⁱⁱ 単なる有無ではなく、"not partake of a circular nature," 「円の性質を享有【分有】しない」

自己に由つて保持せらることにして、——換言せばもし、眞にそれ自身の内に存すと
せば、何物も、其を保持せざる所の物の内に在ること能わざと云うにあり。

然り能わず。【Impossible】

然りと雖もかの保持する所の物は、其保持せらるるものとは別物ならざる可からず。
何となれば、同一なる全体は同時に行動しまた受動すること能わず。もしそれ然りと
せば、一は一たる能わずして二たるにあらずや。

然り。

然らば、一は自己の内にも、他物の内にも何處に在ること能わざるにあらずや。
然り。

【1】且つ、かかる性質のものは、静止し或いは運動するを得るかを思え。
何故に能わざる。

(一四) 一には運動なく静止なし
一は運動或いは静止を有せず
運動の二種類 |
—(一) 性質の |
変化 (二) 自動 |
[locomotion 移動]

然り。

何ぞや。其理由たる、「もし運動すとせば場所に於て運動するか、或いは性質を変
化するかの二者其一たるべし。これ等は運動唯一の種類たればなり。

一、其性質を変し、それ自身たる」とを中止すとせば、曰にこれ「たる能わず。
すで

i 「保持」 Jowett 訳は "be contained" Fowler 訳は "be surrounding with" 田中訳は「取り囲んでいる」

然り。

是故に、一は、性質の変化たる所の運動を経験すること能わざるなり。

明らかに能わず。

然らば、一の運動は場所に於てこれ有るを得るか。

蓋しこれ有らん。【Perhaps.】

自動【移動】の二種——(ア)同一場所に於てするもの(イ)一点より他点に動くもの

然りと雖も、もし場所に於て運動すとせば、これ同一場所に在つて廻転するか、或いは一点より他点に移動することならざる可からず。

然らざる可からず。

かの輪状に運動するものは之を中心於て為ざる可からず。またかの中心に於て廻転するものは、中心ならざる他の部分無かる可からず。然るにかの中心を有せずまた部分を有せざる物は中心の上に運動するは不可能にあらずや。

然り不可能なり。

然りと雖も、一の運動は蓋し場所の変化に存すべきか。

もし運動せざる可からずとせば、蓋し然らん。

吾等既に、一は何物の内にも在り得ざることを証明せしにあらずや。

然り。

一は性質の変化を許さずまた自動【移動】の形をも許さず

然らば一が或物の内に存するに至る【coming into being】とは、なお一層に不可能なり。然らずや。

余は其理由を解せず。

何となれば、かの或物の内に存在し来る【comes into being】ものは、其存在し来りつ有る間は、未だその他物の内に在り能わず、また既に其内に存在したる以上は、全く其外たること能わざればなり。

然り能わず。

是故にかの他物の内に存し来る【coming into being in another】ものは、部分を有せざる可からず。而して一部分は内にあり、他部分はその他物の外に在らざる可からず。然りと雖もかの部分を有せざる所のものは、同一時に全然或物の内たり或るは全然外たる能わざるなり。

真に然り。

またかの部分を有せず、また全体にあらざる物が、或る所に存在し来ることは、なお一層の不可能の事にあらずや。これ部分としても、または全体としても存在し来る」と能わざればなり。

i Fowler 訳は "come into anything"、田中訳は「〔どい〕かに」生ぜるといふ」と

其然るや明らかなり。

然らば一は同一点に在りて廻転して其場所を変ずる能わず、または或る場所に至りて、或物の内に存する能わず、また自己の内に変化すること能わざるにあらずや。真に然り。

果たして然らば如何なる運動と雖も、一は運動し得ざるなり。

運動し得ず。

また、一は同一物の内に在らずまた他の物の内にも在らず。故に何れの能りに静止は不可能

然りと雖も、一は何物の内にも在り得ずとは、吾等の断定せし所にあらずや。然り、吾等之を言えり。

然らば一は同一物の内にあること能わざるにあらずや。

何故に能わざる。

其理由たるや、一もし同一物の内に在りとせば、一は或物の内にあるべし。然り。

吾等また、一はそれ自身の内に在り得ず、また他物の内に在り得ざることは之を言えり。

真に然り。

然らば一は決して同一場所に在せざるなり。

139-B

然るが如し。

然りと雖もかの同一場所に在らざるものは、また決して静止不動たると [never quiet or at rest] 能わざるにあらずや。

然り。

然らば一は静止せるに非ず、また運動せるにもあらざる如し。

正に然るが如し。

(一五) 一は自己と他【other】と同一に【same with】非ず、または自己或いは他と異に非ずまた自己と他【other】と同一に【same with】非ず、または自己或いは他と異に非ず同一に非ず。

何故なるぞ。

もし、自己と別物なりとせば一と別物にして一にあらざるべし。

然り。

もし他と同一なりとせば、一は他にして自己にあらざるべく、かくてまた此仮定説に於てしては、一は一の性質を有せずして、一とは別物たるべきなり。

然る如し。

然らばこれ他と同一に非ず、また自己と異なるに非ず。

然り。

C

一は其一として存する間は、他と別物にもあらねばなし。何となれば、一にあらねばなし、
ただ他のみ、能く他と別物たり得るのみにして、その他のものは能わざればなり【nothing
else】。

真に然り。

D 然らば、一たるべきの理由に由りて【by virtue of being one】、其物他たる」とあらねば
きか。

然り。

然りと雖も、もし一たるの理由に由りて、他たらずとせば、また自口たる理由に由り
ても他たらねばなし。またもし自己たるの理由に由りて、他たらずとせば、自己は他に
あらねばぐく、自口は全く他たらねるが故に、或物より他たらねる可し。

然り。

一はまた自口へ回】【same with】にあらねばなし。

何故なるぞ。

何となれば、一の性質は同【sane】の性質にあらねばなり。

i Fowler 訳じる "other than another," の類いの文言だが、田中訳では、「一」というものには、何かか
ら異なるものであるふべからば、本来的には含まれていないのであって、それはただ「云々」。

何故に然らざる。

物もし或物と同一とならんともこれ必ずしも「たるにあらざればなり。何故ぞや。」

物もし多数【many】と同一となる時は、これ必然に多数にして、決して「にあらざるなり。」

真に然り。

然りと雖ももし「一」と同との間に何等の差別なくして、或物同となる時は、其物常に「一」となるべく、其物「一」となりし時はこれ同にあらざるか。

然り。

是故に「もし自己に同じとせば、これ自己」と「ならずして、一たりまた一にあらざるべし。」

確かにこれ不可能なり。

是故に「一は他と別物たること能わず、また自己と同一なること能わざるなり。然り。」

かくて「一は自他の関係に於て同に非ず、また異にもあらざるにあらずや。然り。No. また同様にも非ず不同様にも非ず

「はまた或物と同様に【like】非ず、また異なるにあらざるべく【unlike itself or other self】に対しても同じではない」。

何故に然るか。

何となれば同様【likeness】とは其様態の同一なるも【sameness of affections】たればなり。然り。

同一なるも、「なる」と【oneness】との、性質を異にせるは既に論ぜし所にあらやや。

然り既に之を論せり。

然りと雖ももし「たる」と以外の様態を有すとせば、「以上たるの或様態を取るゝ」とにして、これ不可能のりいたぬなり。

真に然り。

然らば「は決して同たるよう影響あるべくなく、また他との間にも同様たるべくあるべく」。

【次の文の訳と混淆してゐる。 "Then the one can never be so affected as to be the same either with another or with itself!" 「は決して、他のものと同たるものへ影響あるべくないからねべく」 云々】
—— Fowler 謂 "which is affected in the same way." 田中訳 「同じに同じ規定を含んでゐる」

明らかに能わず。

然らば「は他と同様なる」と【be like】能わず、また自[口]と同様なること能わざるにあらずや。

然り能わず。

また他たるよう影響わるる」と能わざるべし。何となればもし其如き」とありとせば、「以上たるべき方法を以て影響せられわる可からざればなり。

然るべし。

かの自己或いは他と異なる影響を受くるものは、自己或いは他と同様ならざる【be unlike】べし。何となれば影響の同一なることは、同様たることたればなり。

真に然り。

然りと雖も、「は決してその他の方法もて影響わざる如きが故に、決して自己及び他と不同様にあらざるなり。

然り。

然らば「は自他と同様にも不同様にもあらざるべきか。

然り。

(一六)種々の関係を一に附与する矛盾は「の否」定に導く
大きいさの等不等
もなし

i 「方法を以て」は "in such a way" の訳だろうが、Fowler 訳 "in that case" に当る意味であろう。

140-B

また此性質あるが故に、一は自身にもまた他にも同等【equal】に或いは不同等に
もあらざるべきか。

其理由如何。

何となれば、一もし同等なりとせば、其同等なる其物そのものと同一度量【same measures】な
らざる可からざればなり。

真に然り。

C
もし物、比量する所の物より大なるか或いは小なる時は、一は、其小なるものより
は大度量を有し、其大なるものよりは小度量を有すべきにあらずや。

然り。

その他共に比量すべからざる物に於ても、一は、其小なるものよりは大量を有し、
其大なるものよりは小量たるべし。

然り。

然りと雖もかの同一性を有せざる所のものは、如何にして同一度量を有し、或いは
その他同一なるものあるを得べきぞ。

これ不可能なり。

其同一度量を有せざるに於ては、一は自己ともまた他とも同等なること能わざるに

あらずや。

然るが如し。・

D 然りと雖も其度量の多寡は之を問わざるも、其度量を有するに応ずる多くの部分を有し、かくて再び一は「たらずして、度量に応ずる数多の部分を有するなり。

正に然り。

もし一は一度量を有すとせば、これ其度量に等しかるべき。然るに同等の不可能なるは既に之を論じたり。

然り。

然らば一は一度量も、多度量も、少度量も、または同一度量も、全然これ等を有することなく、自己にも他にも同等に非ず、或いは自己にも他にも大にも非ず、小にもあらざるべき。

然り。

E [12] それ然り、吾等仮定して、一は或物よりは年長なりとせんか、年少なりとせんか、或いは同年なりとせんか。

或故に其如く為さざる。

何となれば、かの自己或いは他と同年なるものは、時間上の同等性或いは同様性を

年齢の等不等もなし

有せざる可からず【must partake of equality or likeness of time】。雖も、一が同等性或いは同様性を有し得ざる【not partake of】は前之を論じたり。

然り之を論ぜり。

吾等また其不同等性或いは不同様性を有せざる【not partake of】ゝをも之を論ぜり。

真に然り。

然らば此性質たる所の一は、如何にして、或物より年長たり、年少たり、或いは同年たるを得べき。

如何にするも能わざるなり。

果たして然らば一は自己とも他とも、年長たり、年少たり、また同年たること能わざるにあらずや。

明らかに能わず。

然らば一の性質はかくの如きが故に、全然時之内に在ること能わざる可し。何となれば、かの時之内に存するものは常に自己よりは、長となざる可からざればなり。然り。

i 「長」は底本の欠け。*"be always growing older than itself?"* 自分自身より年長になるなどおかしなことだが、恐らく、時間之内にあらざる年長ぐらへて行く、という意味であろう。

かの年長なるものは、常に或年少なるものよりは年長ならざる可からざるなり。然り。

然らばかの自己よりも年長者たるものは、もし年長者たるべき或物を有せんとせば、同時にまた自己よりは年少者ならざる可からず。

其意味如何。

余の意味せる所は——物は既に異なる所の他物より異なることを要せず。其物現に異なれり。もし其異なること生ぜし【become different】時は、これ異なりし【different has become】ものなり。もし其の異らんとするや、其異なる」といふ有るべし。然りと雖そののかの異なりつつある所のもの【which is becoming different】には、異なること有らざりしことも、或いは將に有らんとすることも、或いは未だ有らぬことも、これ有り得るべしにして、異なり得る所は、ただ変化あるのみ【one which is becoming 成りつつあるもの】。

【Fowler 訳の Google 訳は、「他のものから異なるものは、すでに異なるものと異なる必要はないが、すでに異なるものは異なるべきなければならない。すでに異なるものからは異なる必要があり、今後異なるものからは異なるべきなければならない。しかし、異なるてきているものからは、すでに異なることも、そうなるとしても、すでに異なることはできない。それは必ず異なるべきである。】

C

明らかに然り。

然りと雖も年長とは、年少に対する関係上の相違にして、その他何物に対しても然るにあらざるなり。

然り。

然らばかの物自身【itself自身】よりも年長者となむ【becomes older】所のものは、同時にまた物自レフ【itself自身】よりも年少者たる【becomes younger】ルる可からざるにあらずや。

然り。Yes.

然りと雖もまたそれ自身より長時間たり【become for a longer より長い時間を成り行く】、或いは短時間たる【より短い時間を成り行く】)と能わず、ただ同時に、それ自身と其如く成り、其如く有り、其如く成りたり、また其如く成らんとせざる可からざるなり。これ亦避く可からざることなり。

D
然らば時の中に在り、また時に関与せる所の物は、余の思う所を以てすれば、如何なる場所と雖も其等自身と同年ならざる可からず、また同時に其等自己より老年たり、年少たらざる可からざるにあらずや。

然り。

然るに、一は其等の影響を受けざるにあらずや。【not partake of those affections ノ】の種の限定

の分有はない】

然り。

然らば、一は時の性質を有せず、【not partake of time】、また如何なる時の内にも在るべくのなり。

論議の示めす所然り。

それ然り、然りと雖もかの「有りあ」、「成れり」、「成りつつありき」等の語は、一れ過去の時間に関するいふ【a participation of past time】を意味せらるか。

然り。

またかの「しか有るん【will be】」「有るべし【will become】」「成りしなるん【will have become】」等の語は将来に関するいふ【participation of future time】を意味せらるか。

然り。

また「有る【is】」「成る【becomes】」等の語は現在の時間に関するを意味せらるか。

然り。【底本では、いに改行を欠く。】

もし、一は全然時間の関係なしとせば、決して変化し、変化しつつあり、或いは或時間中に在りき、或いは今変化せり、或いは変化しつつあり、或いは有り、或いは将来成らん、或いは成りしならん、或いは然るべし等のことあらざる可べし。

然りと雖もこれ等は存在を生ずる所以にして、もし凡て之を否定する時は一は存在せず。此故に何等の属性も関係も無し。

最も然り。
然りと雖もこれ等以外、他に存在性を有し得る何等の方法【modes of partaking of being[oboeicę】あるか。

有ること無し。

然らば一は存在するい」と【partake of being 存在を分有する】能わざるなり。

これ推論上より然り。

然らば一は全然有らざるか。【一があるのではない。】

明らかにこれ有らざるなり。

然らば一はかくて一として存在せざるなり【一であるのではない】。何となればむしれ有りて存在を有せりとせば、一は既にこれ有るべしと雖も、もし議論を信ずべしとせば、一は存在せず、または一にあらざるにあらずや。

真に然り

然りと雖もかの存在せざるものは、如何なる属性も、如何なる関係をも許さざるなり。

勿論許さず。

i 田中訳注で、「ある」「である」という日本語に対応する意味で言われている、と。

然らばそれに就いては名称なく、発表【expression 言明】なく、知覚なく、意見なく、または知識も無かるべきか。

其これ無きや明らかなり。

然らば一は名称すべからず、発表すべからず、意見すべからず、知識すべからず、或いは知覚すべからざなり。

然りと推論せざる可からず。

然りと雖もかくの如きは果たして一に關して真を得たりと謂う可きか。
余は然りと信ぜず。

(一七) 最初の仮定説に立ち帰る
もし一存せば、其結果如何

の新方面現れざるかを見ん。

余は其如く為すを得は幸福なりとす。

吾等は言う、もし一にして存在すとせば、其結果は如何ならんとも、共にこれを引き出だすべきなりと。

然り。

142-B

結論不満足

i) の Jowett の訳順は、原著と異なる。名 (オノーマ)、言明 (ロゴス)、知識 (エピステーメー)、感性 (アイステーシス)、意見 (ドクサ) の順である。

然らば吾等始より始むべし——「もし存在すとせば、一は存在し而も存在性を有せざるを得るか【not partake of being】」。

能わざるなり。

一あらばこれ存在性を享有すべく、部分と、一と、存とを有す

C

然らば「一は存在性【being】を有すべし。然りと雖も其存在性は「一と同一」には【same with the one】あらざるべし。何となれば、もしこれ同一なりとせば「の存在【the being of the one】】にあらざるべく、または「一は存在性を享有【participated in being】せざるければなり。これ「一は存在せり」との断定は「一は「一なり」との断定と同一なる可きが故なり。然るに吾等の仮定説は、「もし「一なる時は、其如何なる結果生ずるかと謂うに非ずして、もし「存在せばと謂うにあらずや——余の言正当ならざるか。

全く正當なり。

余の意味する所は、存在は「一と同一意味を有せざと言うにあらずや。

勿論なり。

吾等もし一言以て之を蔽いて、「一は存在せり【One is,】」と言わば、*「存在性を享有せり【partakes of being】」*と言ふに等しからざるか。

全く然り。

請う今一度問わん、もし「存すとせば其結果如何。此仮定説は、必然に、「一は部分

(一八) 存在せる、無
限多数

各部分は各部分自ら一と存在とを有して無限に至る。

D

を有する如き性質のものなりとの意味を含意せるにあらずや。

何故に然るか。

乃ち——もし存在は「一」の属性なりと為し、もし「一」は存在して、存在は「一」たる時は、「一」は存在の賓辭たり、またもし存在と「一」とは同一ならざる時は、また「一」は吾等が前定せるが如く、存在するが故に、全体、もし「一」なる時は【もし全体も「一」であるなら】、それ自身たるべく【それ自身が「一」であり】、その部分として「一」と存在とを有せざる可からざるにあらずや。

然り。

これ等各諸部分——及び存在——は単に一部分と称すべきか、或いは「部分」なる語は「全体」なる語に相関なるべきか。

後者なり。

然らばかの「一」たる所のものは、全体と部分との両者なるか【both a whole and has a part? 全体でもあり、部分を持つという両者】。

然り。

且つ「一」の諸部分に就いて謂わんに、もしこれ——余は意味す存在と「一」——なりとせば、両者各位を包含し得ざるにはあらざるか——乃ち「一」は存在に要むる所あり【is

E

the one wanting to being? 「一は存在を求めるか」、存在は、「一に要むる所あらざるか。ⁱ
能わざるなり。

かくて各諸部分は、また順次に「一と存在とを有して、少なくとも二部分より成立し、此理無限に之を拡めて如何なる部分も常にこれ等両部分を有せり」と謂うべきなり。何となれば存在は常に「一を包含し、「一は常に存在を包含し、かくて「一は常に消滅して「一となる可ければなり。

然り。

かくて「もし存在せば無限に多たるべきにあらずや。

明らかに然り。

吾等他の方向を取りて進まん。

如何なる方向ぞ。

吾等は言わざりしか、「一は存在性を取る【the one partakes of being】が故に「一は有りと。

然り。

此方法を以て、「もし存在を有すとせば、多となるにあらずや。

ⁱ Jowett 訳の 'wanting' は、Fowler 訳 'Can unity cease to be a part of being or...' 「統一が存在の一部であることをやめたり、存在が統一の一部であるいふをやめたり」、田中訳「「一」なるものが部分としての有から、また部分としての有は部分としての「一」から、離れてそのまま残るものだろうか」

真に然り。

(一九)「一を存在より分離せしむるもの多を含有するも一もし存在より離さるるも其等はなお異なるものとの一を存在より離対なり

一を存在より離して考へる」とと為さんか——此

の謂える所の、かの其享有せし所のものより之を離して考へる」とと為さんか——此抽象したる「一は、単に「なるのみなるか、また多なるか。

余は「一なり」と信ず。

請う考究せん——かの「一の存在は「一とは異なる可からざるにあらずや。何となれば「一は存在に非ずして【the one is not being】」、ただ「一が存在を享有せり【as one, only partook of being】」と思考せらる可ければなり。

然り。

もし存在と「一とは異なる」二者なりとせば、其「一」の「たるは、其存在と異なるが故に非ず、また存在の存在たるは、其^{それ}「一」と異なるが故に非ずして、これ等は互いに其他^{そのため}たる^{そのたる}とと、異なる」との理由あるが為なり【differ from one another in virtue of otherness and difference】。

然り。

かくて他は「ともまた存在とも同一にあらざるなり。

同一にあらざるや明らかなり。

i Jowett 訳 Fowler 訳「もに他 (other) と取るが、田中訳は「異」としている。

これに吾等存在及び他、或いは存在及び一、或いは一及び他を取らんか、如何なるかかる場合と雖も、吾等二物を取るものにして、これ正に両者を並ばせ取ると謂うべきなり。

何故に然るか。

乃ち——君は存在を言えるにあらずや。

然り。

また一をも。

然り。

然らば今や吾等其等両者の何れかに就いて言えるにあらずや。

然り。

それ然り。吾等の存在及び一を謂う時は、余は其等両者を言えるにあらずや。

然り。

余もし存在及び他を謂い、或いは一及び他を謂うや——凡てかかる場合に於ては余は両者を謂わざるか。

然り。

かの正確に両者と称する所のものは、また一ならざる可からざるにあらずや。

D

(一〇) 数の構成
一より一に移る

疑う可きなし。

二物は如何にして、一たり得べあむ。 [And of two things how can either by any possibility not be one? 二つのもののうち、どちらかが一つにならないはずがあるうか。]

奇数より偶数に

能わざるなり。

然らば一对の個物は併せて一たりとせば、其等は各、一たり得べあむにあらず

や。

其然るや明らかなり。

またもし各其等は、一なりとせば或、一を或一对に加える時は、全体は三たるなり。

然り。

三は奇数たり二は偶数たらずや。

勿論なり。

加法より乗法に

E
ここにもし一ある時はまた一倍あるべく、もし二ある時は、二に二倍あるべし。即

もし一の二倍が二を成す時は、一の三倍は三を成すか。

然り。

ⁱ Fowler 訳 "And if things are two, must not each of them be one?" 田中訳は「... それぞれが何等かの工夫によつて、二つではなふよりこれらるものだらうか。」

「」に「」ありまた二倍あり、さればまた二の二倍あるべく、「」に「」ありまた三倍あり、さればまた三の三倍あるべきにあらずや。
勿論なり。

もし三ありまた二倍ありとせば、「」に三の二倍あるべく、もし「」ありまた三倍ありとせば二の三倍あるべきにあらずや。

疑うべきなし。

ここに吾等偶数の偶数乗、奇数の奇数乗、偶数の奇数乗、奇数の偶数乗せしものを有せり。

真に然り。

もしそれ然りとせば何等存在の要なき数のなお残れるものあるか。

何等の残れるものなし。

然らば、もし「あらばまた数なかる可からざるにあらずや。
然り。

一より差生じ、差
より有らゆる数を
生ず

然りと雖もむし「」に数あらば、また多あり、存在無数の多あらざる可からざるにあらずや。何となれば数は多に於て無限にして、また存在を享有す【partakes also of being】。余の言正当ならざるか。

然り正当なり。

もし一切の数は存在を享有す【participates in being,】とせば、数の有らゆる部分も亦之【存在】を享有すべし。

然り。

(二二) 存在及び
一の無限の可分解性
數は存在と俱在し
て拡大す

144-B

【14】 然らば存在は物の多数全体に配当せられ、苟も有る所の物は、如何に大なりとも如何に小なりとも、存在を有せざるものなし。其之を有せずと想像するが如きは実に不合理のことなるなり。何となれば苟も有る所のものにして、存在を有せざるもの有り得ざればなり。

然り。

またこれ最大なるものにも、最小なるものにも有らゆる大きさのものにも分解せられ、一切の物よりもなお多くに分裂し、其分裂や無限なりとす。

真に然り。

然らば存在は最大数【greatest number 最も多い】の部分を有せりと謂う可きか。

然り最大数なり。

或いは、存在の部分たる所のものにして、而も部分を有せざるものあるか。
有り能わず。

C

何となれば存在の一部は如何に小なりとも一たればなり

然りと雖ももしこれ有りて、また全く其如く然らざる可からずとせば、存在は「一たらざる可からず、決して無たること能わざるなり。

然り。

然らば、「は存在の有らゆる個々の部分にも着在し、如何なる部分と雖も大小を問わず、其これ無きはなし【or whatever may be the size of it いかなる部分にも欠けることはない】。

然り。

然りと雖も請う思考せん——「は其完全の状態に於て同時に多処に有るを得るか。否、余は其不可能を知る。

また、「は存在と同じ多所に有るが故にまた多部分に分割せられざる可からずする」と言ふのは、【unless divided. 分割されない限り】、存在の全ての部分と共に存在すること能わざればなり。

真に然り。

かの部分を有せるものは、部分の数と同じかるべし。
然り。

然らば吾等が今しも、存在は最大数の諸部分に分配せらると言ひしは誤なり。何と

i "in its entirety," :Fowler 訳 "still be a whole" 田中訳は「全体のまま」

E

なれば、一は、以上の諸部分に分配せられず、ただ、一に等しき部分にのみ分配せらるるのみにして、一は存在に要むる所なく *the one is never wanting to being*、存在も亦、一に要むる所なく、両者俱に同等たり【co-equal】俱に拡布せる【co-extensive】ものなればなり。

真に然り。

然らば、自身は存在に由つて数部分に分裂して、多たり無限たるにあらずや。

真に然り。

(二二) 一の矛盾
觀
抽象的、一も、現實
の一も、一たり多
たり、有限たり無
限たり

然らばかの存在を有する所の一は、啻に多たるのみに止まらず、一自身はまた存在に分配せられて多たらざる可からざるにあらずや。

然り。

【15】且つ部分とは全体の部分にして、一は全体として、定限を有する【be limited limitされる】ものなり。何となれば部分は全体に由つて包含せらるるものなればなり。

然り。

かの其包含するものは定限にあらずや。

勿論然り。

然らば、もし存在を有して、一たりまた多たりとせば、全体と部分とは定限すと雖も、亦數に於ては無定限【unlimited】にあらずや。

145

明らかに然り。

其定限を有せるが故に、また極限【extremes 末端】を有せるにあらずや。

然り。

一は全体にして始、中、終を有し、また形を有す
くして全体たること能わざればなり。もし何物なりともこれ等の内の或物を欠損せる
時は、其物既は【any longer 最早・既に】全体にあらざるなり。

然り。

然らば一は始、中、終を有するものの如し。

然らん。

然りと雖も、中とは極端【末端】より同等距離にあるものなるべし。然らざれば中
は中にあらざればなり。

然り。

然らば一は形をして、直形【直線】たり、円形たり、或いは両者の結合たるべき
にあらずや。

真に然り。

もしそれ然りとせば、一は自己以内にあり、また自己以外にあるべし。

(二三三) 一は自己
の内にあれども亦
他の外にあり

諸部分の総和として一は自己の内にあり

何故ぞ。
凡て部分なるものは全体の内に存するものにして、一として全体外にあるものにあらざればなり。

然り。

凡てが部分は全体に包含せらるるにあらずや。

然り。

一は諸部分の凡てにして、凡てよりも多からずまた少からざるなり。

然り。

而して一は全体なるか。

勿論なり。

然る一に、全部分もし全体中に在りて、一は其等の凡てたり、また全体たり、凡て其等は全体に由つて包含せらるるものなりとせば、一は、一に包含せらるるものにして、一はここに、一の中に存すべきなり。

真に然り。

全体として一は他のは部分中にあらず、または凡ての一部、または部分の或内にあらず、一以上の一の一内で、一は凡ての内にありとせば、全体は内にあらざればなり

D

物の内に存するものにもあらず。何となれば全体もし凡ての内にありとせば、全体は

一の内に在らざる可からざればなり。其理由たる、もし或一の内に全体存せざることありとせば、全体は一切の部分の中に存する能わざればなり。これ、欠くる所ある部分は凡ての部分の一にして、全体もし此内に在らずとせば、全体如何で其等一切の部分中にあるを得んや。

然り在り得ざるなり。

また全体は部分中の或ものの中に存する能わず。何となれば全体もし部分中の或もの内に存し得とせば、これ大が小の中に存し得と謂うものにして、不可能の事たる可ければなり。

然り不可能なり。

然るに全体もし一の内に存せず、一以上の内にも存せず、また部分全部の内にも存ぜずとせば、全体は此他の或もの内に存するか、然らざれば全然何處にも在存〔存在〕せざることとなざる可からず。

然り。

もしこれ何處にも存せずとせば、これ何ものにもあらざるなり。然りと雖も其全体たるも自己の内に存せずとせば、他のものの内に存せざる可からざるなり。真に然り。

然らば「を全体と見做す時は他のもの内に在るべしと雖も、もし之を一切の部分なりと見做す時は、自身の内にありと謂うべく、」に「は自身として自身の内にあり、また他の内にありと謂わざる可からず。

然り。

(二四) 一は静止
せると同時に運動止
せり
故に一は静止せる
と同時に運動せり

ここに於て「は此性質を有するが故に、必然上静と同時に運動せり」と謂う可し。
其理由如何。

即ち「」の内に存すればなり。
其静止せるは「」の内に存し、存在は「」の内にありて此以外に出づることなく、同

【"The one is at rest since it is in itself, for being in one, and not passing out of this, it is in the same, which is itself."】Google 訳は「「は、それ自身の中に在るがゆえに静止している。なぜなら、「」の中に在り、そこから出る」となく、それ自身である同一のものの中に在るからである。」】

然り。
かの常に同【same】の内に存せるものは、常に静止せるものないやる可からず。
然り。

之に反して、かの常に他の内にある所の物は、決して同の内にあらわる可し。もし同の内に在らずとせば決して静止する」となし。もし静止する」となければ、これ運動

せるものにあらずや。

然り。

然らば、一は常に自ら自身内に、また他の内に存し、常に静止に兼ねるに運動せるものと謂うべし。

明らかに然り。

また自身と同一たり、また自身とは他物たり、また他【the others】と同一たり、他とは別物たらざる可からず。これ前論より継続する所の推論なり。

何故に然るか。

(二五) 一と非一とは異たりまた同たり
二物の四種の可能
的関係――

明らかに然り。

而して一はそれ自身の部分なるか。

明らかに然らず。

一は自己に対する関係上、部分にあらざるが故に、一が自己に対する関係は、全体が部分に対する如き」と能わざるなり。

i "the same with the others" は「一以外の者共と同じだ」、「同一」では複数なのを外してしまつ。

B

146-C

然り。

然りと雖も「は」は「と異なるか【is the one other than one?】^o

否。

故に「は自身と異なるに非ず【not other than itself】^o

明らかに然り。

一がそれ自身に対するや同の関係にあり
一がそれ自身に対するや同の関係に對する関係ある

もしそれ「は異に非ず【neither other】」全體に非ず、またはそれ自身に対する関係ある部分に非ずとせば、「はそれ自身と同たる可からざるにあらずや。

然り。

然るに物が「それ自身」より他處に在る時、もし此「それ自身」なるものが自己ⁱと共に同一場所に存留する時は、其物^{そのもの}はそれ「自己」ⁱⁱと異なるべし。何となれば其物他處に存すべければなり。

真に然り。

然らば「はそれ自身に存すると同時に、また他に存することを証明せられたりと謂うべあか。【"Then the one has been shown to ..."であるから、「示されていただろう?】

然るに自身と異なる所にあるに於ける所の関係にあり

i 「関係」が「part 部分」だけに懸つてゐるようすに読むが、other, whole, part の三に懸るとも読める
ii 「もし…時は、…べし。」を田中訳は、自身と同じ所にある自身とは異なるのは必然、と読む。

D

然り。

ここに於て、一はそれ自身と異なるべきが如し。

然り。

次に、もし或物ありて、或物と異なる時は、これ異なる物と異なることにあらずして何ぞや。

然り。

一はまた非一と異なり、異と異なることを證明せらる

【16】 凡ての一たらざる物は、一と異なるべく、また一は非一と異なるものたらざるか。

然り勿論なり。

然らば一は異なるもの【the others^他】と異なるべし。

真に然り。

然りと雖も思い見よ——絶対同と絶対異とは互いに相反せるにあらずや。

然り。

他の見地よりせば一も非一も異を享有し得ず、故に互いに異なる能はず

absolute same, absolute other, ところ absolute を田中訳は「それ自体として」とする。
「常に……存す」を田中訳は、「何時にもせよあることを欲するか」と読む。

ii i

存せざるべし。

もしそれ異は決して同に存せず【同に含まれず】とせば、或時間中異の存せる所には
E
【other が含まれているものは】何物も在る」となし。何となれば其時間中は、如何に短時

間なりとするも、異は同たる【同に含まれ】可ければなり。これ真理ならざるか。

然り。

かくて異、【other】は決して同に存せずとせば、異は何物なりとも其存せる所には在
ること能わざむべし。

真に然り。

然らば異は非有^マにも、「にも存せざるべきか。【in the not-one, or in the one 非】にも「にも】

然り存せず。

然らば異たる」と【otherness】の理由によりて、「は非一と異なり、或いは非一は、
と異なるにあらざるなり。

然り。

また其等は、異を享有するにあらざる【not partaking of the other】よりは、其等自身たる
の理由に由つて、互いに相異なるにあらざるなり。

i Jowett, Fowler 訳ともに reason と訳す所を、田中訳は「力」と訳す。次の文も同じく。

然り。

然りと雖も其等もし其等自身たることか、或いは他【other】たることかの理由によつて、他たるにあらざるよりは、其等は全然相互と異なることを遁るるにあらずや。然り遁れん。

且つ非有は一を享有すること能わざるが故に数たること能わざず、また一の部分たり、全体たること能わざず

且つ非一は、一を享有する能わざ【cannot partake of the one】。然らずんば非一は非一たらずして【it would not have been not-one, 非一でなかつたはずで】、或方法に於て一たりしならん。然り。

非一はまた数たること能わざず、何となればもし数を有する時は、これ已に非一に非ざればなり。【田中注：先に論じられたように、数には「が含まれるから。】

然り。

非一はまた一の部分に非ず。或いは寧ろ、其場合に於ては、一を享有するにあらずや。然り享有せん。

果たして然らば何れの点より觀察するも、一と非一とは別物にして、一は非一の部分に非ず、または全体にも非ず、或いは非一は一の部分に非ず、または全体にもあらざるなり。ⁱ 「あらざるよりは」、「*i*が懸るとするなら、「other でないとするならば」、以下、田中訳、^{まで}相互に異なるゝは、我々の手から遁れる事になるだろ。

前の関係表に拠りて、一は非一と同じく、またそれ自身及び他とも同たり異なるなり

然り。

然りと雖も吾等は曰く、かの互々の部分に非ずまたは全体にも非ず、また互々と異なるにもあらざるものは、互々と同一【same】なるべしと。吾等かく言いしにあらずや。

然り。

然らば一は、非一に対する此関係なるが故に、それと同一なりと謂うべきか。

吾等其如く言わん。

然らば一はそれ自身と他。【the others】も同一にして、またそれ自身と異なり、また他。

とも異なるなり。

結論然るが如し。

またこれ、それ自身及び他と同様【like】たり、不同様【unlike】たるか。

或いは然らん。

一、己に【すでに】他と異なることを証明されし上は、他も亦一と異なるべし。

然り。

一は、他が一と異なると同一程度に於て、他と異なるべく、何等の多少なかるべきか。

(二六) 同と不同と
一はそれ自身及び他と同たり不同たり。他何となれば一及び他は互々に異なるれりと雖も、同様なる程度に於いて異なるなり

ii i 田中注によれば、146Cで「に關して言われている。

"to be other than the others"、田中訳は「一でないものとはとにかく異なること」

然り。

もし多もなく少もなしとせば、然らば同一程度なり [in a like degree] と謂ふべか。然り。

故に其等は同様なる方法にて、影響せらる

D

かの「が他」と異なり、他も亦同じく「と異なる所の影響の力に由りて [In virtue of the affection by]、「は他の如く、他は」の如く影響せらるべとなり。

余は命名の例を挙げん。君は物に名称を附与するか。

然り

君は其名称を、或いは一度、或いは数度唱えるか。

然り

君もし一度之を唱える時は、これ其名称なるを意味し、一度以上之を唱える時は君の意味する所の他の或物なりと為すか、或いは君の言う所は、其一度なると一度以上なるとを問わず、常に同一物ならざる可からざるか。

勿論同一物ならざる可からず。

「他【*ēt*erov, other】」とは或物に附与せられたる名称にあらずや。

i 田中訳では「影響」は、「異なるという規定を受け入れ」と、次は「一と同じ規定を受け入れて

E

然り。

然らば、君が「他」なる語を使用するや、其一度なると數度なるとに閑せず、君は其名称たる所を名称とし、その他には其名称を与えるべし。

真に然り。

然らば吾等が、他は「一」と異なれり、また「一」は他と異なれりと謂うに際して、「他」なる語を反復するや、吾等は其名称の適用せらるべき其性質を謂えるものにして、その他に及ばずあらざるなり。

全く然り。

然らば他【others】と異なる所の「一」及び「一」と異なる所の他に於て、両者に適用せらるる所の「他」なる語は、同一状態【same condition】ⁱにあるものにして、かの同一状態とのことに於て同様なざること証明せられること證明せらるること証明せられること證明せらるること證明せられたり

然り。

然らばかの「一」が由つて以て他と異なる所の影響の力に由りて、凡ての物は凡ての物と同じ【like】かるべし。何となれば凡ての物は凡ての物と異なるが故なり。

然り。

i Fowler 謂 "same state"、田中訳は「同じ規定をもつ」

【17】且つ同様【like】は不同様【unlike】に反対せり。
然り。

他も亦同【same】に反対せり。

これ亦然り。

一亦他と同一なりとは已に証明せられし所。

然り。

また他と同一たることは、他と異なる」との反対たるなり。

然り。

其故に「は他、たりとの」に於て、「は同様なり【like】と証明せらるるか。

然り。

然りと雖も「は同なり【same】との」に於て、「はかのそれを不同様ならしむる所の反対影響の力に由りて同様ならぬべし。これ他たる」との影響【affection of otherness】ⁱたりしなり。

然り。

ⁱ Fowler 説 "opposite of the quality which makes it like," 田中訳は「それを似たものにする規定（異）とは反対の規定（同）をぬぐひする規定（）」

然らば同【same】は物を不同様ならしむるなり。もしそれ然らざらんには、これ他の反対たらざる可ければなり。

真に然り。

然らば一は他とは同様たり、また不同様たるべく、その他たる限りは同様たり、其同【same】たる限りは不同様たるなり。

然り。其議論使用せらるべし【"may be used"; Fowler 訳: "seems to be tenable."】。

ここにお他の議論あり。

他の見地よりする
時は反対の結果生
ず

何ぞや。

其同様なる方法に影響せらるる限りは、その他の方法もて影響さるものに非ず、其異なる方法もて影響されざるが故に、不同様に非ず、また不同様にあらざるが故に同様たるなり。然りと雖も他に由つて影響さるる限りは他のものとなり、その他様に影響せらるるが故に不同様たるなり。

真に然り。

然らばこれ等二個【次のイとロ】の理由中の一に由るか、或いは両者に由りて、一は他と同一たり【イ】、また他と異なる【ロ】が故に、「は他」と同様たりまた不同様たるべし。然り。

之と同じく、これ等二個【次のイとロ】の理由中の一か、或いは其両者に由りて、一、
はそれ自身と異なり【イ】、またそれ自身と同様なる【ロ】が故に、一はそれ自身と同
様たり、また不同様なるにあらずや。

勿論なり。

(二二七) 接触しました
接触せず

またこの事を思考せよ——一は如何なる程度までそれ自身及び他に接触【touch,
attraction】田中補訳(つながる)せらるるか接触せざるかを。

余は思考しつつあり。

一は全体たる所のそれ自身の内に存することは既に証明されたるなり。
然り。

また他の物の内に存することも、
然り。 Yes.

一はそれ自身及び他に接触すと雖も、それ自身内に存する以上
に接触し、また接触せざるべし
其両者なるが故に両
者に接触す

E

その他物の内に存する以上は、一は他物に接触すと雖も、それ自身内に存する以上
は、一は其等に接触することを阻止せられ、ただそれ自身にのみ接触すべし。
明らかに然り。

然らば其結論たるや、一は両者【一、自身と他のもの】に接触すと謂うにあらずや。
然り。

然りと雖も新見地に就いては君は以て如何と為す——かの他に接触せんとする所のものは、其接触せんとするものの次にありて、以て接触する所のものの存せる最も近き場所を占有せざる可からざるにあらずや。

然り。

果たして然らば、「もし自身に接触せんとせば、当然自身の次に在りて、一自身の在る所の次なる場所を占めざる可からざるにあらずや。

當に然るべきなり。

この事、一の二たること【一が二つあること】を要し、同時に二箇所に在るべき」とを要すと雖も、其一の一たる以上は、決してこの事あらざるべし。

然り。

然らば、一は二と成るにあらざるよりは、決してそれ自身に接触すること能わざるなり。

り。

能わざるなり。

また他に接触すること能わざるなり。

何故に能わざる。

また他に接触すること能わざる。他は一物たること能わざればなり

接觸とは少なくとも二個の別離物あるをも要すとせば、一は自身に接觸すること能わざるなり。何と能わざれば、一は二たる能わざればなり

其理由たる、何物と雖も他に接觸せんとする物は、其接觸せんとする所の物より離

れ居り、また其次に在りて、第三物が其間に介し得ざる可からざるにあり。
真に然り。

然らば接触を可能ならしめんには少なくとも二物在ることを必要と為す。

然り。

もし二物に、第三物は其順次に加わる時は、其等の数は三となり、接触は二たる可し。

然り。Yes.

かくて一項加わる毎に、一接触加わり、二に其結果として、項数より少なき一となる接触ありとなるなり、第一の【first 最初の】二項は接触数に過ぐること一にして、全項数は全接触数に過ぐること一なるや相同じ。かくて此後、項数一を加える毎に接触数亦一を加えるなり。

真に然り。

物の全数は如何ならんとも、接触数は常に少なき一と一なり。

真に然り。

然りと雖も物もしただ一個のみ存して二個在らざる時は、二に接触は有らざるか。

如何でこれ有らん。

かの他なるものは、一と異なるものにして、一に非ず、また【一】一の部分にもあら

C

B

ざることは吾等の言いし所にあらずや。

真に然り。

其等もし其内に、一を有せざる時は、ここに数を有せざるなり。

勿論これなし。

D
然らば他なるものは、一にも非ず二にも非ず、または何等数を以て名称すべからざるか。

然り名称すべからず。

然らば、単独に、一なる時は、一は存在せざるか。

存在せざるや明らかなり。

もし二なき時は接触は有らざるか。

これ有るなし。

然らばもしここに接触なくんば、一は他に接触せず、また他も、一に接触せざるなるべし。

然り接触せざるなり。

凡てこれ等の理由を以て、一はそれ自身及び他に接触し、また接触せざるなるか。真に然り。

(二八) 一は之自身及び他に等しくまた不等なり

一はそれ自身及び他に等しく、また等しからざるか。

E

【18】なおまた進みて——、一はそれ自身及び他【others】に等しく、また等しからざるか。君の意味する所如何。

一もし他よりも大なるか小なるか、或いは他は、一よりも大なるか小なるかの時は、其等は其一たること及び他たることの功德に由りて【in virtue ofおかげで】、互いに他より大ならず小ならざるべし。然りと雖も其等が現に然るが如きに加えるに、其等もし同等性を有すとせば、其等は互いに等しかるべき、またもし一は小を有し、他は大を有するか、或いは一は大を有し、他は小を有すとせば、如何なる種類なりとも大を有するものは大にして小を有するものは小たるべきか。

然り。

然らば、ここに大なること及び小なることの二種の觀念あるなり。何となればもし其等無しとせば、其等は互いに相反対し、また其存在せる所のものに現在すること【be present in】能わざるべし。

然り。

然らば、もし小が一に現在す【田中訳「うちに生ずる】とせば、これ全体か、或いは全体の部分かに存すべきなり。

i Fowler 説 "come into"、田中訳は「うちに生ずる」

小は大及び小を同享
有せざるが故に、等にして、それ自身及び他に対しても、同等性を享有せざる可からず。

然り。

第一この事を仮定せよ——」れ全「[the whole one] と対等【co-equal】にして、併に拡がれる【co-extensive】か、或いは「を包有するかなるべし。

然り。

もしそれ「と俱に拡がれりとせば、「と対等なるべく、またもし「を包有すとせば、一よりも大なるべし。

勿論なり。

然りと雖も小は何物とも同等たり、大たり、また大たること、或いは同等たる」との機能を有し、またそれ自身の機能を有せざる」と能わざるにあらずや。

能わざるなり。

然らば小は「の全体中に存する能わざ、もし止むなくんばただその部分のみに存するを得べきか。

然り。

且つこれ全部分に【in all of a part 部分の凡てについて】あらざるや確実なり。何となれば、もし全部分なりとせば、全体に関する難問起り、小は其存する所の何れの部分にも同等 i 「もし全部分なりとせば」に当る文はない。小はどの部分にもあり得ないと言つてゐるだけ。

たり、また大たるべきなり。

然り。

然らば小は全体にも、部分にも、何物にも存することなく、ただ真のactual smallness】以外何等小さき物有ること無けん。

真に然り。

また大も亦一の内に存する無けん。何となれば、大もし或物の内に存すとせば、大それ自身、即ち、大の抛つて以て存する所の他に、他の或大なるもの有ることとなるべし。またもし小其物の存せざる時は、一もし大なる時は其を超過せざる可からざるなり。故に小全然これ無き時は、これ亦不可能たるなり。

真に然り。

然りと雖も絶対大は、ただ絶対小より大にして、小はただ絶対大より小なるのみ。
真に然り。

然らば其等もし大たることも小たることも之を有せずとせば、他物は、一よりも大に非ず小に非ず、また大たることも小たることも、一に対する関係上、之を超過し、或

i Fowler 訳、田中訳ともに、「」は現れない。「大であるなら対応する小があつて、」との意味あいの文が続く。

D

C

いは超過せらるる所の何等の力をも有せるに非ず、ただ相互の関係に於てのみこれ有るに過ぎず。またもし一にして大たることも小たることも之を有せずとせば、一は其等或いは他物【others】よりも大にも非ず、または小にもあらざる可し。

然り。

一、もし他より大たらずまた小たらずとせば、一は其等を超過し、また超過せざる」と能わざるか。

然り能わず。

かの之を超過せず、また超過されざるものは、同等性【equality】たらざる可からず。其同等性たるが故に、また同等【equal】たらざる可からざるなり。

勿論なり。

これ亦一がそれ自身に対する関係にも適用すべき理にして、其^マ、それ自身に大たることも小たることも之を有せざるが故に、一はそれ自身を超過することなく、超過せらるることなく、ただそれ自身と同等性たり、また同等たるべきなり。

然り。

然らば一はそれ自身及び他と同等たるべきか。

明らかに然り。

一はそれ自身に等
しからず——一は有
し、また包有せら
るが故なり、故に
に自身より大たり
また小たるなり

然るに、「は全然自己自身たるが故に、また自身を周囲して、自身の外に在るべく、
それ自身を包有せるが故に自身よりも大なるべく、自身中に包有せらるるが故に小な
るべく、かくて自身よりも大たるべく小たるべきなり。

然るべし。

何物なりとも、及び他の内に包含せられざるもの有ること能わざるにあらずや。

勿論なり。

然りと雖も苟も有る所のものは、何処にか在らざる可からざるは確実なり。

然り。

然りと雖もかの或物の内に在る所のものは小にして、内に其物を有する所のものは
大なるべく、その他一物が他物の内に在るべきよう無し。
そのもの

真に然り。

他に等しからず
一は他物を包含
して包含せらるる
が故に。故に其等
自身より大たりま
た小たるなり

其一及び他以外に、他に何物もこれ有るなく、また其等は或物の内に在らざる可か
らざるが故に、其等もし何れかに在らざる可からずとせば、其等は相互の内に在り、
他は一の内に在らざる可からざるにあらずや。

其然るや明らかなり。

然りと雖も「が他中に存する以上は、他は、より大なる [greater] べし。其理由たる

や、他。は能く、一を包含するが故なり。故に、一は他よりも小なる【less】べし、これ、一は他の内に包含せらるるが故なり。また他。が一の内に在るが故に、同一原則に基づき一は他。よりも大にして、他。は一よりも小なるべし。

真に然り。

然らば、一は、それ自身及び他と、同等たり、大たり、また小たるべきか。

其然るや明らかなり。

もしそれ大たり、小たり、同等たりとせば、一はそれ自身及び他と同等、多、或いは少度量或いは分量たるべく、度量然りとせば、また部分に就いても然るべきか。

勿論なり。

かの自己及び他に
同等たり不^等同等たり、
あるものは数或いは度量に於いて自身及び他に同等たり、
及び他に同等たり、
不^等同等たらざる可
からず

もし同等、多【more】、少の度量或いは部分に就いて然りとせば、數に於て自身及び他より多なるか或いは少なるべく、同じく數に於ても自身及び他と同等なるべきか。何故に然るか。

一は其超過する所の其等の物よりは多量【more measures】なるべく、また其度量に於けるが如く、^{あまた}数多の部分に就いても然るべく、また其同等なる所のもの及び其少なぎ

ii i "measures or divisions" は、原語の意味を決め難いからであろう。Fowler 訳は measuresのみ。
「部分」は誤訳、"measures or divisions" であるから先の「分量」。「部分」は parts と分けている。

D 所のものに就いても然るべきなり。

E 真に然り。

またそれ自身よりも大たりまた小たり、またそれ自身に等きが故に、一はそれ自身と同等度量【equal measures】たり、またそれ自身よりも多く、少部分に就いて然るが故に、もしそれ度量に就いて然りとせば、部分に就いても然るべきなり。

F 然るべし。

G そのそれ自身と同等部分たるが故に、一は計数上それ自身と同等たるべく、其大部分に就いて然るが故にそれ自身よりも多く、少部分に就いて然るが故にそれ自身より少なかるべきか。

H 然り。

I 今論移してその他の諸物に適用することを得べし。其、一が其等より大なるが故に、數に於て其等より大なるべく、其小なるが故に、數に於て小なるべく、其大きさに於て他物と同等なるが故に數に於て一は其等と同等なるべし。

J 然り。

K 且つ一は數に於てそれ自身及び一切その他の諸物と、同等たり多たり、少たるべきが如し。

然るべし。

(二九) 一もし時に閑
せば結果如何

一は時に閑与して自身及び他より老年となり若年となるか、或いは年少たるか、或いは其如くなるものなるか。或いは時に身及び他より老年と存続せば時に閑与す。時は常に前進せり、故に一は常に自己よりも老年となり。

[19] 一はまた時に閑与する [partake of time 時を分有する] ものなるか。一はそれ自身及び他より老年たり、或いは年少たるか、或いは其如くなるものなるか。或いは時に閑与する功徳に由りて 【by virtue of participation in time 分有するおかげで】、自身及び他より年少ともならず、または年長ともならむわるか。

其意味如何。

一もしくは年少たるか、或いは其如くなるものなるか。或いは時に身及び他より老年となり若年となるか、或いは年少たるか、或いは其如くなるものなるか。或いは時に身よりも老年となり。

然り。

然りと雖も「しか在り」 (εἶναι) 【to be (εἶναι)】 とはただ現在に於ける存在の享有たり [participation of being]、「然りし」とは過去に於ける存在の享有たり、「將に然らん」とは将来の存在の享有にあらずや。

真に然り。

然らば一は存在を享有するが故に、また時を享有するか。

然り。

時は常に前進せるにあらずや。

然り。

されど老若は相関語なるが故に老年となるとは一方に意は老年となるを意味す

然らば、一は時の中に前進せるが故に、常にそれ自身よりも老年となりつつあるにあらずや。

然り。

君は老年なるものは若くなる所の者より老年となることを記憶せるか。

余は記憶せり。

然らば、一はそれ自身より老年となるが故に、一は同時に老年となるにあらずや。

然り。

かくて、一はそれ自身よりも老年となると同時に、また老年となるにあらずや。

然り。

一、変化して「然りし [was]」と「然らん [will be]」との中間なる「今」なる時点に達する時は、これ老年にはあらざるか。何となれば過去より将来に至らんには、現在を飛び越すこと能わざればなり。

然り能わず。

一は現在に到着するまでは老年とすずり、ここに達して老年となるなり。何となれば、もし進行するに於ては、現在は之に追及すること能わざり、其変化を止めて老年となるなり。

i "And it is older (is it not?)" - 「そして、一は、……老年（にはあらざるか?）」

C

B

ればなり。これ進行する物の性質として、現在と将来とに接触せんが為に、現在を放ち、将来を捉え、以て両者の間に変化する過程となす。

真に然り。

然りと雖も、かの変化する所の物は、決して現在を跳越すること能わず。一旦現在に到着するや、其物^{そのもの}変化を中止し、然る後現在「然り」なるもの変化を生ずるなり。其然るや明らかなり。

かくて一の、老年となるに当りては、一旦現在に到着して、其変化を停止し、こゝに老年となるなり。

然り。

また一は其老年となりつつある所のそれよりは老年にして、一はそれ自身よりも老年となりつつあるなり。

然り。

かの老年なるものは、其若年のものよりも老年なるにあらずや。

真に然り。

152-D

ⁱ "that than which it was becoming older," 田中訳は「それがへあるゝというのは、それまでに年長になりつつあった比較の相手に対して、」

(三〇) 一の自身及び他に於ける関係
一は常に存在してそれ自身よりも老年たる年に
なり

E

然らば、一は其老年とならんとして現在に達せし時は、それ自身よりも若年たるにあらずや。

然り。

然りと雖も、一の存在中は、現在は、永久に現在なり【the present is always present with the one during all its being】。何となれば、一の存在せる間は、常に今たればなり。

然り。

然らば、一は常に存在して、同時にまたそれ自身よりも老年となり、また若年となるなり。

真に然り。

一はまた、それ自身よりも長時間たり、或いは長時間となるか、或いは同等時間な
一時間にてありまた成るか故に同年に同齡なり。故に自身と

同等時間なり。

然りと雖ももし、一はそれ自身と同等時間となり、また然ありとせば、一はそれ自身と
同年に非ず
より老年に非ず
若年

勿論なり。

i - Fowler 記 "the present is inseparable from the one throughout its whole existence;"

かの同齢たる者は、老年にも非ず、若年にもあらざるか。然り。

然らば、「はそれ自身と同一時間と成り、また同一時間にして、それ自身よりは老年にも非ず、老年にも非ず、また成りもせざるか。然り。

「はそれ自身よりも若年なるか老年なるか。小は大より前に在り、一は最小数なり故に最初に存して老年な

く成るか。またその他物に於ける関係や如何。「は其等よりも老年たり、若年たり、また其如く成るか。

余は答え能わず。

君は少なくとも」の事を告ぐるを得ん——「より他のもの等【others】は「よりも數多【more than】」——他は「たりしならんも、他のもの等【the others】は數多にして【multitude】、「よりも多き」とを。

然り、其等は數多あり。

數多【multitude】は「よりも大数【a number larger】を意味す【implies】^o。勿論。

小と大と何れか先ず來り、或いは存在するに至る【come into existence】と謂うべきか。

i Fowler 説 "would partake of ..."、田中訳は「より多い数を分有する」にならぬだろう。」

小なり。

B

然らば最小なるものは最初のものにして、これ即ち一なるか。
然り。

然らば苟も数を有せる凡ての物の一は、最も始めに存在するものなり。然りと雖も
その他凡ての物亦数を有すと雖も、皆これ複数にして单数にあらざるなり。

然り。

其最も始めに存在し来る【come into being 生じる】より、一は他物。【the others】より前に
存在し、他物は後なりと想像せざる可からず。而して後に存在し来るものは、其前 在
のもの【which preceded them】よりは若年なりと謂うべきにあらずや。かくて他物【other
things】は一よりも若年にして、一は他物よりも老年なるにあらずや。

真に然り。

【20】他の問題は君は以て如何と為す。一は自性に違いて存在し来り得となすか、
或いは【さようなことは】不可能なりと為すか。

不可能なり。

然りと雖も、一は部分を有せりとのことは確かに之を論じたり。もしそれ部分あら
んには始、中、終あるにあらずや。【原文は「始めと終わりそして中を」の順】
一は部分を有す故に
それ等の最後に存在在
し来る

然り。

凡て始めなるものは、一、それ自身の始め、及びその他一切のものの始めも、先ず第一に存在するものにして、始めの次にその他の物來り、最後に終なるものに達す。

然り。

凡てこれ等他なるもの【these others】は、全体及び一の部分にして、其終に達するや否や、全体となり、一となることを断言すべきか。

然り、これ吾等の言わざる可からざる所なり。

然りと雖も終は最後に来るものにして、一は最後に来るべき性質のものなり。また其、一は其性質に従う以外の方法を以てしては、存在すること能わず、其性質は、他の物。【the others】の後に、終と同時に存在し来ることを要求するなり。

其然るや明らかなり。

然らば一は他物よりも若年たり、他物は一よりも老年たるなり。
これ亦余の判断に於ては明瞭なり。

それ然り。また始めなるもの、或いは一、或いは或物の或他の部分にして、もし一部分にして数部分ならざる時は、其一部分たるが故に、また必然上、たらざる可からざるにあらずや。

故に一は他物よりも若年にしてまた各部分は一たるなり。

D

一は各部分と共に存在し来るものなるが故に他物より老年に非ず若年に非ず同年なり

E

然り。

かくて、一は各部分と共に存在し来り——其第一の部分の存在し来ると共に、第二の部分及びその他凡てと共に存在し来り、その他の部分に添加せられて終局に達して一部全体となる所の、何れの部分に対しても要むる所【be wanting to】あらざるべく、また中部にも、始部にも、終部にも或いは其等の内何れにも要むる所【be wanting to】あらずして、其変化の過程は進行せるにあらずや。【be wanting to: 田中訳は「…から離れて外に】真に然り。

然らば一は凡てその他のもの【the others】と同一年齢にして、其性質に矛盾なき以上は、他物の前に在らず、後に非ず同時たるなり。故に今此議論に拋る時は、一は他物よりも老年に非ず、若年に非ず、他物も亦一に対して然り。然るに前論に拋る時は一は個物より老年たり、また若年たり、他も亦一に対して然るものなり。

然り。

かくの如きの方法を以て、一は存在し、また変化す。然りと雖もその他物より老年となり、若年となり、また他物が、一に対して然ることと、また老年とも若年とも成らざることとに就いては吾等如何に之を説明すべき。吾等は其存在に対しても変化と同一年とも成り能わず。これにも他にも通用すべし

(三一) 新昏惑

もし同様なる時間を両者に加える時は、何物も他物に対する関係上、始めに然りよりも老年とも若年とも成らざることにも他にも通用すべし

余は答え能わず。

余は敢て言わん、もし一物【one thing】他【another】よりも老年たり、或いは若年たらんとも、其始めに然りしよりも大なる程度に於て老年とも若年とも成り得ざるなりと。何となれば時期或いはその他何物たるを問わず、同等を不同等に加える時は、其等の間には、始と同じき相異を遺すものたればなり。

勿論なり。

然らばかの存在せる物は、其然る以上老年とも若年とも成り得ざるなり。これ年齢の相違は永久に同じければなり。一【一方】は老年たり、老年と成り、他【他方】は若年となると雖も、其等は其如く成りつつあるにあらざるなり。

真に然り。

是故に存在せる所の一は、存在せる他物よりも、老年とも若年とも成らざるなり。
然り。

然りと雖も、其等は他の方法に於て老年となり、或いは若年と成り得ざるかを思考せん。

(二二) 昏惑益々昏惑
時間の大・小両時に加え
る時は両者の差割合は減少し老は若となり、若は老となるべし。

(二三) 昏惑益々昏惑
時間の大・小両時に加え
る時は両者とももし同等割合となり、若は老となるべし。

其は如何。

一、もし他より老年なりとせば、他よりも久しき以前に存在したるものと謂う可し。
然り

D
然りと雖も請う再考せん。吾等もし同等時間を、大時間と小時間に加える時は、大時間と小時間とは、前と同等の割合の差異あるか、或いは小なる割合の差異あるか。

小なる割合の差異なり。

然らば一の年齢と、他の年齢との差異は、此後は前の如く大なることなく、もし同等時間の其等両者に加増せらるる時は、其等両者の差は、愈々小となるべきか。
然り。

E
かの以前よりも、或他のものに比して、其年齢の差の小となるものは、老年となるよりも、寧ろ其関係上老年たる所のものよりも、若年たるべきか。

然り、若年となるべし。

一、もし老年となるべしとせば、前に言いし所の他のもの【the others】は、かの一、に対する関係上、以前よりも老年となるべきなり。

然り。

然らばかの若年となりし所のものは、以前に老年となり、また老年たりし所のもの

の相関係上、老年となるものにして、眞実老年となれるに非ず、ただ常に変化ししあるなり。何となれば一は常に若年の方に向い、他は老年の方に向いつつあれどなり。之と同様く、かの老年の方は常に若年者よりも老年となるの方向にあるなり。何となれば其等は常に反対方角に進行せるが故に、其等は互いに其方向を反対にし、若年者は老年よりも老年となり、老年者は若年者よりも若年となればなり。然りと雖も其等は変化すること能わざるなり。何となればもし其等にして既に変化せしならんには其等は存在すべく、單に変化にあらざるべし。然りと雖もこれ不可能の事なり。何となれば其等は常に、互い他【one another】より老年となり、また若年となりつつありて一、一はその、他。より老年たり、前在者【prior 田中訳「先に生まれ」】たるべく認めらしが故に、他。よりも老年となり、他。は其、後に存在し來りしが故に、一よりも老年となるが故なり。かくて同一方法に於て、他。の一に対する關係も同一たるなり。これ他は、よりも老年にして、前在者として認められしが故なり。

明らかに然り。

其、一物は他物【another】より老年となり、或いは若年ともならざるが故に、此点に於て、其等は常に同等数を以て互いに相異なり、他【the one '】は他より老年とも成り能わず、また若年ともなり能わず、他。も亦、一に対して然ること能わざるなり。然り

C

と雖もかの早く存在し來りしものと、後に存在し來りしものとは、永続して互いに其差異の割合を異にせざる可からざるが故に——此見地よりする時は、他は、よりも老年たり、また若年たり、他も亦一に対して其如くならざる可からざるなり。

明らかに然り。

D
凡てこれ等の理由によりて、一はそれ自身及び他よりも老年たり、若年たり、また其如く成り、またそれ自身或いは他よりも老年たり、若年たり、また其如く成ることなし。

然り。

然りと雖も、一は時に関与し【partakes of time, 分有】し、また老年となり、若年となることに関与するが故に、一はまた過去、現在、及び将来に関与せざる可からざるにあらずや。

勿論関与せざる可からず。

然らば、一は、在りき、在り、在らんにして、また成りき、成りつつあり、また成らんなり。

然り。

また、一に關係し、一に属せる或物在り、在りき在らんか。

然り。

吾等此瞬時に【at this moment】、「に」に関する意見、知識、及び知覚を有するが故に、
「に」に「に」に関する意見、知識、知覚あるか。

全く然り。

然らば「に」にそれに就いての名称あり、発表ありて、名称せられ発表せられ、此種
の他の諸物に関する所の物【everything】は、「に」に「[に]も」関するものたるなり。

然り、真に然り。

(三二) 変化の性質
反対性質は同時に
一物に賓辞たらし
め得べからず

【21】 なお第三に【third time】(三度目) 吾等この事を思考せん。もし「は、前に述べし
が如く、「たると同時に多たり、「に非ず多に非ず、また時間に関与す【participates】
とせば、其の一の「たる以上は時に存在を享有し【partake of being】、また其の一「たる以上
以上は、時に存在を享有せずと謂わざる可からざるにあらずや。
然り。

然りと雖も其存在を享有せざるの時、一果たして存在を享有し得るか。或いは其存
在を享有する時果たして存在を享有せざることを得るか。

一は存在と非存在
を同時に有し得ず。

之を為すは時を異
にす

i Fowler 訳 "we are now carrying on ..." 田中訳「今も...行つてゐる」。以下、原文は、知識(エピステー
メー) 意見(ドクサ) 知覚(アイステーシス) の順に、それらすべてを、と。

能わざるなり。

然らば、一の存在を享有し、また享有せざるは、時を異にするものなるべし。何となればこれ其存在を享有し、また享有せざる唯一の方法たればなり。

真に然り。

また其存在を取り【assumes being 分取し】、また之を棄つる所の時は有らざるか——何となれば或時に之を受け、また之を放棄するにあらざるよりは、如何にして同一物を有し、また之を有せざることを得ん。

能わざるなり。

其存在を取ることは、これ君の以て成りつつあり【becoming】と謂う所のものにあらずや。
然り。

其放棄とは、これ君の破滅と謂う所のものにあらずや。

然り。

然らば、一は、存在を取ると、之を放棄するとに由つて、成来し【becomes】、また破滅すものの如し。

然り。

変化如何にして生
ずるか

156

B

其一たり、多たり、また其方法の成り来たり破滅たるが故に、其是が一となる時は多たること止み、其多たる時は、一たること止むにあらずや。

然り。

其是が一となり、多となるが故に、「は分離と集合とを経験するは避く可からずや」とにあらずや。

避く可からず。

其同様たり【becomes like 同様になつたり】不同様たるや、「は同化し【be assimilated 同化されたり】」不同化されれる可からずやにあらずや。

然り。

其大となり【becomes greater】、小となり【or less】、同等となる【or equal】や、「は成長し、減少し【or diminish】」また同等【or be equalized】たるに可からずやにあらずや。

真に然り。

其運動せる時に静止し、其静止せる時に運動に変化するが如きは、決して何れの時にも有り得ぬべよか。

如何で有り得ん。

然りと雖も前に静止せる物其後運動し、或いは前に運動せるもの其後静止するには、

156-C

変化を経験すること無くしては、これ不可能なり。

然り不可能なり。

物の同時に静止し運動せる時なるもの無きや確かなり。

然り有り能わず。

然りと雖も変化すること無くして変化なるものあり得ざるなり。

真に然り。

然らば何れの時に変化するか。何となれば其静止せる時にも、または運動せる時にも、或いは時間中にある時にも変化し得ざればなり。

然り変化し得ず。

(三四) 瞬時
物の変化は瞬時中
に行わる

如何なるものぞ。

瞬時これなり。何となれば瞬時は一種の物を包有し居りて、これよりして物は二種何れかの状態に変化を生ずるもの如し。何となれば、変化なるものは静止の如き状態より生ずるものに非ず、また躍動の如き状態より生ずるものに非ざればなり。然り

i moment : Fowler 訳 "instant"、田中訳「たちまち（忽然）」

E

と雖も、ここに瞬間と称する不思議の物ありて、何れの時の中にも存せずして静止と運動との中間に存し、其運動より静止に変化し、静止より運動に変化するものは、皆これに入り、これに出づるなり。

然るが如し。

然らば一は、静止し、また運動せるが故に、兩者何れかに変化すべし。何となればただ此方法を以てして、始めて両者たるを得べければなり。其変化するに當つてや瞬間に於てし、其変化せんとするや、時間中にあることなく、運動状態にも静止状態にもあらざるなり。

然り。

その他の変化の関係に於ても、——其存在より存在の停止に【cessation of being】¹変じ、或いは非存在より存在に【from not-being into becoming 成る】移る時も、亦同一にして——運動と静止との或状態の中間を経過し、有るに非ず、有らざるに非ず、成来する【becomes】に非ず、また破滅するにもあらざるなり。

真に然り。

之と同様なる原則に基づき、「より多に、多より」に移る時も、「は」に非ず、ま

i Fowler 訳 "destruction"、田中訳「なくなる（消滅）」

B

た多にも非ず、分離せるに非ず、また集合せるにもあらざるなり。其同様より不同様に、不同様より同様に移るに於ても、これ同様に非ずまた不同様にも非ず、同化状態に非ず、また不同化状態にもあらざるなり。其小より大及び同等に、また其反対順序に移るに於ても、これ小に非ず大に非ず、また同等にも非ず、または増大し、減少し、或いは同等となるにもあらざるなり。

真に然り。

然らばこれ等は凡て、「もし存在を有する時は、其受くる所の影響【the affections of the one.】」なり。

勿論然り。

〔二二五〕「もし存在する時は、他に如何なる事か【が】生ず——」れ亦考究せば、他是如何に影響せらるるか。もし存する時の他の影響

然り。

〔二二六〕然りと雖も、「もし存在する時は、他に如何なる事か【が】生ず——」れ亦考究すべき」とにあらざや。然り。

然らば吾等この事を考究せん——「もし存すとせば」以外の他物の受くる影響如何。

然り吾等之を考究せん。

i Fowler 訳 "this would happen to the one," 田中訳 「いれらの規定をすべて受け入れる」となる」

一以外の諸物は、一に非ず然るに其等とは亦一に関与する何となれば他なる諸物は、一たる全体部分たればなり。

C

ここに、「の他に多くの物あり。其等【the others】は、「に非ざるなり。何となればもし其等一なりとせば、其等は「より他たると能わざるなり。

真に然り。

他はまた全然「なきこと能わざして其等はただ或方法に於て「を享有するなり。如何なる方法にてぞ。

其理由たるや、「他の「より他たるは、其等は部分を有せるが故なり。其等もし部分を有せざる時は、單に「たるのみなればなり。

然り。

部分は、吾等の断定せるが如く、全体と関係を有せるにあらずや。
然り吾等其如く言えり。

而して全体とは、必然上、多より成立せる所の「たらざる可からず。また部分は、一部分たる可し。何となれば各諸部分は多の部分に非ずして全体の部分たればなり。其意味如何。

もし物【anything】多の一 部分たり、また自ら其多中の「たる時は「であるので」、其物必ずそれ自身の一【a part一部】たるべく、これ不可能の事にして、他の諸部分もし凡て部分なりとせば、其物【は】他の部分各個の一部たるべし。何となれば其物そのもの

D

もし或もの一部たらざる時は、ただ此一を除くの外一切の他の一部分たるべく、かくて一々の部分にはあらざる可し。またもし各一々の部分たらざる時は、其物多中の何れのものの部分にもあらざる可し。また其何れのものの部分にも非ずとせば其物無き物の或物たるべく、凡て其等無き所の物の部分たり、また何物にてもあること能わざるなり。

其能わざるや明らかなり。

然らばその部分は多くの部分【a part of the many】に非ず、また凡ての部分にも非ずして、ただ或单一形状にして凡ての部分より形成されたる完全なる一体即ち吾等の所謂全体なるものの部分たり——部分とは即ち此全体の部分を謂うなり。

然り。

然らばもし他は部分を有すとせば、其等は全体と一とを享有すべきなり。

真に然り。

然らば一以外の他は其の部分を有せる所の完全なる、全体たるべきなり。
然り。

(三二八) 一以外の他は
数に於いて無限なり
また各部分は單に部
分たるのみに止まらず、
また自ら完全なる
全体なり

E

各部【each part】に就いて論ずるも亦同じ。何となれば部分は一を享有せざる可からざるなり——もし各部分は一の部分なりとせば、意うにこれその他のものより離れた

る、にして、自己関係 [self-related]ⁱ のものなるを意味し、然らずんば此物各部ならざればなり。

真に然り。

然りと雖も、吾等が、部分は「一」を享有す【participating】^j言う時は、此物、明らかに「一」と異なるものたらざる可からず。もしそれ然らばとせば此物単に「一」を享有するのみに非ずして、また、「一」たりしならん。然りと雖も【whereas】ⁱⁱただ「其物のみは「一」たるを得るなり。

真に然り。

全体と部分とは、両者共に「一」を享有【participate】せざる可からず。何となれば全体は一全体たり、部分はその部分たるべく、各部分は全体の一部分にして、全体は部分の全体たる可ければなり。

真に然り。

かの、「一」を享有【participate】する所の物は、「一」とは異なるものにあらずや。
勿論然り。

ⁱ Fowler 訳「existing by itself」、田中訳「それ自体でのあり方をしている」
ⁱⁱ Jowett 訳「whereas.. can..」で受けただけだが、Fowler 訳田中訳とともに、「一」であるのは「一」以外不可能と訳す。従つて次の答えも「そう、不可能」と受ける。ギリシャ語原文も「ἀδύνατον」とある。

またかの「以外の諸物は多なり。何となればもし「以外の物にして一にも非ず、または一以上【more than one】よりも非ずとせば其等は無たる可ければなり。

真に然り。

然りと雖も、かの、部分として「に関与し【participate】」また全体として「に関与する所の諸物は、一たる以上のものなるが故に、其「に関与する所の諸物は数にて無限たらざる可からず。

何故なるぞ。

此問題をかく觀察せんか——其「に関与する点に於て、其等は「に非ずして、其等が「を享有【partaking】せんとする其時に當つては、「を享有せざるは事實にはあらざるか。

明らかに然り。

C
其時其等は「を現有せざる所の多數【multitudes 多の複数形】として其如く為すか。

真に然り。

(三七) 他なるものの
矛盾觀

吾等もし觀念中【in idea】にて其最小なる部分を、其等より抽き去る時は、其最小なる部分にして、もし「を享有せざる時は、これ多數にして、「にあらざるにあらずや。
i Fowler 訳「in thought」、田中訳「思考の上で」、ギリシャ語原文にもイデア・エイドスの文字なし。

他は其性質に於いて無限たると同時に有限なり

然らざる可からず。

もし吾等單純に、またそれ自身に於て其等の性質の他側面 [other side of their nature]ⁱ の観察を継続せんか、其等は吾等の知り得る限り、數に於て無限たるにはあらざるか。

然り。

然るに其各部分が一部分となるに当たつてや、諸部分は全体に対し、また相互に対し、また全体は諸部分に対して、其関係上有限たるなり。

まさに然り。

一、以外他の物 [the others] に来る所の結果たるや、其等と一との結合は、其等の内に新分子を作り、其物、其等相互の関係上、其等に制限を与えるものの如し。然るに其等自身の性質に於ては何等の制限を有せざるなり。

其然るや明らかなり。

全体たり、また部分たり、また部 分たり

E 享有するなり [partake of limit]。
然り。

然らば一以外の他 [the others] は、全体としてまた部分として無限たり、また限定を

i Fowler 訳 "nature of the class,"、田中訳「」の種目の片一方の本来自然のあり方

故に其等は同様たり
りまた不同様たり

其理由如何。

其等は其性質に於て無定限【unlimited】なるが故に、凡て同一方法もて影響せらるる
なり。

真に然り。

其等はまた凡て定限を享有せるが故に、凡て同一方法もて影響せらるるなり。

勿論なり。

然りと雖も其等のものの状態は、定限と無限とを兼ねるものにして、其等は反対両
方法に影響さるるものなり。

然り。

而して反対とは物の最も同様ならざるものなり。

然り。

ここに於て其等の受くる影響の、何れか其一を考えるに、其等は其等自身及び相
互同様なるべく、またもし其等両者の関係を合せ考える時は、最も相^{opposed}反対し【most
opposed】、また最も不同様たるなり。

真に然るが如し。

然らば他なるもの【the others】は其等自身及び相互に同様たり、また不同様なるか。

真に然り。

其等は互いに同一たりまた別物たり、運動しました静止し、有らる反対影響を経験することは困難なくして証明するを得べし。何となれば其等が前述諸影響を経験せることは、既に証明されし所なればなり。

真に然り。

(三八) 結果の反対方 向 前結論の反対

159-B

【23】 その他の是問題に関する議論は、明白なることとしてここにこれを省略し、再びかの「は存在せりと仮定して、凡てこれが反対は、他に對して同じく真理なるか否かを考究する」とと為さん。

願わくは其如く為さんことを。

然らば吾等再び議論を始めて問わん、もし「有りとせば、他の受くる所の影響【the affections of the others】」は如何と。

吾等それを問題と為さん。

一は他と區別せられ、他は「^マと道別【distinct 区別】」せらるべきにあらずや。

何故なるべ。

何となれば「^レ等兩者以外他に「^レ等と區別せらるべき物あらざればなり。」これ『「^レ Fowle 説 "what must happen to the things which..』、田中訳、他は「^レういう規定を受け入れねば..』

C

i | Fowle 説 "what must happen to the things which..』、田中訳、他は「^レういう規定を受け入れねば..』

及び他』なる語は万物を包有すればなり。

然り万物を包有せり。

然らば吾等其等即ち其内に「と他との存在する以外何物も存在せりと想像する」と能わざるなり。

何物もこれ有るなし。

然らば「と他とは決して同中に存せざるなり【never in the same】。

真に然り。

一と他とは同中に
存せず

然らば其等は互いに相分別せられるか。
然り。

吾等はまた、真に「たるものは、部分を有せりと言つ」と能わざるや確実なり。
然り言い能わず。

然らば「もし他と分別し、また部分を有せずとせば、」は全体としてまた部分として
他中に存せざるべし。
存する能わず。

然らばもし其等にして全体或いは部分に関与す【partake either in】、「」と無しとせば、
他が「」を享有する【partake of the one】の方法「」として「」れ有る無し。

D

これ無き如し。

然らば他は一たり、或いは其等自身に於て何等の一なるものを有すべきの道あるな
きか。

これ有る無し。

他は一より分離せるが故に一にも非ず他にも非ず

E また他は多にもあらざるべし。何となれば其等もし多なりとせば、其等の各部分は全
体の部分たるのみなればなり。然るに他は一に閥与するの方法なきが故に、一に非
ず、他【many 多】に非ず、全体に非ず、または部分にもあらざるなり。

真に然り。

然らば他は、もし全然一を欠損すとせば、二或いは三に非ず、またはそれを包有す
るにあらざるなり。

真に然り。

また其等反対者たること能わず何となればそれ等もし一を享
り有し得ずとせば二物を享し得ざればな
り

其然るや明らかなり。

一なき他は零なり

然りと雖もかの何物をも享有せざるもののが、二物を享有するとは、吾等之を不可能なりと為ししにあらずや。

然り不可能なり。

然らば、他は、同様にも非ず、同様ならざるにも非ず、または両者にもあらざるなり。何となれば、其等もし同様なるか、或いは不同様なりとせば、其等は二性質中の其一を享有すべく、これ一物たるべし。もし其等両者なりとせば、其等は両反対の性質を享有するものにしてこれ二物たるべく、これ不可能の事なるは既に証明せし所なり。

真に然り。

これ故に其等は同に非ず、異に非ず、運動せるに非ず、静止せるに非ず、成来状態に在るにあらず、破滅状態にあるに非ず、大に非ず、小に非ず、同等に非ず、または此種の如何なるものをも経験せるにあらざるなり。何となれば、もし其等にして何等かかる影響を経験するを能くすとせば、其等は一、二、三、及び奇数及び偶数に関与【participate】するを得べしと雖も、其等が全く、如何なる方法に於ても、一を欠如せるが故に、かくの如き事に関与せざるは既に証明されしを以てなり。

真に然り。

故にもし、有りとせば、それ自身及び他物との關係上、一は万物たり、また無たる

一は万物たりまた無
たり

なり。
然り。

〔24〕 次に吾等、もし「有らずとせば、其結果の如何なるやは、^{まさ}當に考究すべき所にあらずや。

然り吾等考究せざる可からず。

「もし、「有らずとせば」——との仮定説の意味や如何。此仮定説と、「もし非「有らずとせば」との仮定説との間には、何等の差別あるべきか。

然り差別ありと為す。

ただ差別あるのみなるか、或いはもし「「有らずとせば」と「もし非「有らずとせば」」との両様の言語は、全然反対なるにはあらざるか。

然り全然反対なり。

今人ありてかく言うと仮定せんか、曰く——もし大あらず、もし小あらず或いは此種のものあらずとせばと言うとせば、其かくの如き言語を為す時は、彼其「某有らず〔what is not〕」との事は、他の諸物と別物なりとのことを意味せるにあらざるか。

確かに然り。

かくて其人「もし「有らずとせば」」と言う時は、其の人明らかに、其「有らずと」は何を意味す

「有らざる所の「一」と

時には他物と以外のものを意味す

とのことは、凡て他と異なることを意味せりと知る、これ其人の意味せる所にあらざるか。

然り。

人「一」と謂わば、其人或る知られたる物を言い、また次に凡て他の物と異なる所の或物を言うものにして、其人、「一」に存在を賓辞と為すと、非存在を賓辭と為すとは問う所にあらざるなり。何となればかの「有らず」と称する所のものは全く同一なる或物として知らるるものにして、他の諸物と區別せらるるなり。

然り。

然らば余は再び疑問を始めて問わん——「もし」、「あらずとせば」、其結果如何。第一には、それに就いての知識ある可く、然らざれば「もし」、「あらずとせば」なる語の意味は知られざる可し。

真に然り。

第二には、他は「一」と異なる可し。然らざれば「一」は他と異なるものとして謂う可からざるにあらざるか。

然り。

然らば其異なることは、それと其智識とに属するものなり。何となれば、吾等が「一

D

は他と異なれりと言ふや、他に於ける差異に就いて謂うものに非ずして、ただ「に就いて」言うものなればなり。

E
明らかに然り。

且つかの有らずと為す所の「は、或物【something】たり、また「其の」「此の【this】」「、」
れ等」及びその他かくの如き」との関係に關与し【partakes of relation】、また「是【this】」
の属性たるなり。何となれば、或いは「以外の他。」の【the others】にして、もし「或
る【some】」或いは前に言いし所の他の諸関係に關与するにあらざる時は、それに就
いて語る能わず、また有らざる所の、「の如何なる属性も関係も、之を語ること能わ
ず、また何物たりとも謂う可からざればなり。

真に然り。

然らば存在をも之を「に附与せしめ【be ascribed to 屬屬させ】得ある可し、これ「は有
らざればなり。然りと雖も有らざる所の「は、もし「及びその他何物も有らずとせ
ば、多くの物に關与する【participate】を得べく、或いは寧ろ關与せざる可からざるな
り。然りと雖ももし「も、或いは有らざる所の「も、存在せずと想像されずして、吾

i Jowett 訳は單に "may or rather must participate" とするが、Fowler 訳は、多くのものに 'partaking' を
妨げるものがなく、が先行する。田中訳は、分有するに差支えないものも沢山あつて、が先行する。

等は異なる性質の或物に就いて語りつつある者なりとせば、吾等はそれに就いて何物をも賓辞と為す」と【predicate 述べるいと】能わざるなり。然るに今もし仮定して、有らざる所の一も、その他何物も有ること無しとせば、「一は其賓辞に於て「それ」及び多くの他の物を享有【participate】せざる可かひざむなり。

然り。

(四〇) 有らざる所の
一は同様たりまた不同
様たり
一は他と不同様なり、
故に自己には同様なる
ことを有すべし

一はまた他物との関係上不同様なることを有すべし。何となれば他は「一」と異にして、別種のものたる可ければなり。

然り。

別種の諸物はまた其種類に於て他たるにあらずや。

勿論なり。

種類を異にせる物は同様ならざるにあらずや。

然り同様ならず。

もし其等一と同様ならずとせば、かの同様ならざるものは、其等と同様ならざるや

明らかなるべし。

明らかに然り。

B

i "the others being different from the one" 田中謹注 "the others" を多くの箇所で「の意味に取つてゐる。

然らば一は不同様性を有して、その関係上他は一と不同様たるにあらずや。
然るが如し。

またもし他物に対する不同様性は一に附与せらるとせば、一はそれ自身に同様性を
有せざる可からず。

何故に然るか。

もし一は一に対して不同様性を有すとせば、或他の事を意味せざる可らず。然らざ
れば此仮定説は一に關せざるなり。然りと雖も、一は一以外或物に關係するにあらず
や。

全く然り。

然りと雖も其事能わざるなり。

能わざるなり。

然らば一はそれ自身との同様なることを有せざる可からざるか。

有せざる可からず。

(四一) 不同等たり
りまた同等たり
た

また一は他と同等【equal】にあらざるなり。何となればもし同等なりとせば、其同
等の功德に由りて、一は有ると同時にまた其等と同等たる可ければなり。然るに一、
もし存在を有せずとせば、有にも非ずまた同等にもあらざるにあらずや。

有たらざる所の一つ
他と不同等にして他
はまたそれと不同等な
り

然る能わず。
然りと雖も其、他と同等ならざるが故に、他も亦それと同等たること能わざるにあ
らすや。

然り同等ならず。

同等ならざる諸物は不同等なるか。

然り。

其等は不同等と不同等なるか。

勿論なり。

然りと雖も不同等を
享有し、また大、小、
同等を享有す

然らば一は不同等性を享有するものにして、此関係上、他はそれと不同等なり。
真に然り。

不同等は、大たることと小たることとを包含せるか。
然り。

然らば、もしかくの如き性質のものならんには、大たることと、小たることとを有
するにあらずや。
真に然るが如し。

大と小とは常に分離して独立せるにはあらずや。

然り。

然らば両者の間に常に或物存するか。

然りこれ有り。

其両者の間に存するものは同等たること以外に何等これ有るべしと君は思うか。

否【】両者の中間に有るものは同等たることこれなり [it is equality]。然らばかの大たることと、小たることとを有せるものは、また其両者の間に介在する所の同等なるものを有するか。

其これ有るや明らかなり。

然らば有らざる所の者が、大たること、小たること及び同等たることを享有するもの如きにあらずや。

明らかに然り。

(四一) 有たらざる所の「は」また有たり
此物一種の存在を享す
有す

且つ、これ一種の方法に於て存在を享有するものならざる可からざるにあらずや。

何故に然るか。

これ然らざる可からず。何となれば、もしそれ然らずとせば、吾等の、「は」は存在せずとの言は真理たらざるに至るべきなり。然りと雖も吾等もし真理を語るべしと
i "the one, which is not, partakes, ..." Jowett 訳は "the non-existent one, ..." 田中訳「あらぬ所の「は」」

せば、吾等は明瞭に其有る所のものを語らざる可からず。然らざるか。

然り。

吾等眞実を語ることを断言するが故に、また吾等は有る所の事を断言せざる可からざるなり。

【Certainly. 然り。——底本に於いて欠如している。】

何となれば非存在は存在を、存在は非存在を含有すればなり

ここに於て、「は、其有らざる時に有るが如き觀あるなり。何となればもし其有らざる時に有らずして、ただ存在の或物を中止して [relinquish]、非有と成らんとするに當つてや、これ直ちに有たるべければなり [it would at once be.]」

全く然り。

然らば非有たる「、もし自己」を維持せんと欲せば、非有 [not-being] の結縛 [bond] として非有の存在を有せざる可からざる」と、恰も存在が自己自身の存在を完全ならしめんが為に、非有の非有を結縛として有せざる可からざるが如し。何となれば存在の存在、非存在 [not-being] の非存在の最も眞実なる確定は、存在が存在の存在を有し、非存在の存在を享有せざる時にして、——これ存在の完成なり。また其非存在が

i Jowett 訳は "the non-existent one exists." 田中訳は「「はあらぬものでへある」という」
ii Jowett 訳は "If it is not non-existent, but gives up something of being to not-being," 田中訳は大きく異なり、「「があらぬものなのではなく、有の何かを非有に対して許すのだとしようなら」」

非存在の非存在を享有せず、ただ非存在の存在を享有する時——これ非存在の完成と謂う可きなり。

真に然り。

されば有たる所のものは非存在を享有し、有たらざる所のものは存在を享有するものなるが故に、一はまた非有たらんが為に【in order not to be】有を享有せざる可からざるにあらずや。

然り。

然らば、一もし存せずとせば、明らかに存在を有せるにあらずや。
明らかに然り。

またもしこれ無しとせば、また非存在を有せるにあらずや。

勿論なり。

然りと雖も或一定状態【state】に存せる物、其状態にあらざらんとする時は、運動な
んには一より他に変
きことを得るか。
能わざるなり。

(四三) 運動し同時に
静止す
然りと雖も両者たら
んには可からず、故
に運動せり

i Jowett 訳は "condition"、田中訳は「所持」ギリシャ語は "ἔχειν" ヘクシス、持つという意が近い、と。
然らば存在せる所の物にして、一定状態に在らざらんとせば、ここに変化を含有せ

るか。

然り。

変化は運動なりと謂わざる可からざるにあらずや。

然り運動なり。

且つ、一は存在し、また存在せざることは既に証明されしにあらずや。

然り。

これ故に同一状態 [same state]ⁱ にあり、またあらざるなり。

然り。

かくて有ならざる一は、其存在より非存在に変化するの理由を以て、また運動せるものなることは証明せられたり。

真に然るが如し。

然りと雖も事実上、此物存することなくして、有る所の物の内、何処にも存する」となしとせば、一所より地所に変移すること能わざるにあらずや。

能わざるなり。

然らば此物場所の変化に由つて運動すること能わざるなり。

(ア) 場所の変化に由りて能わざる(イ) 同一場所に廻転するこ
とに由りて能わざる

D

ⁱ Jowett 訳は "a given condition" 田中訳「ある仕方の身の持し方をする」

然り。

また同一点に廻転すること能わざるなり。何となれば、此物何等同一場所に接触することなればなり。これ同一なるものは存在し、また存在せざる所のものは、存在物中に算すべからざればなり。

算する能わざ。

然らば、もし存せずとせば、存在せざる物の内に廻転すること能わざるべし。

(ウ) また性質の変化
に由つても能わず

また一は、其有ると無きとを問わず、其物自身より他に変化せしめ能わざるなり。
何となれば、もし変化して、それ自身より別物となるとせば、吾等之を一なりと見做す能わざらずして、これ他物たるなり。

故に不变なり

E 然りと雖も、もし何等變化を受くることなく、同一場所に廻転すること無く、または場所を変ずることもこれ無しとせば、果たして運動するを得べしと為すか。
能わざるなり。

E

然りと雖も、もし何等変化を受くることなく、同一場所に廻転すること無く、または場所を変ずることもこれ無しとせば、果たして運動するを得べしと為すか。能わざるなり。

運動は変化を含む

然り。

然らば、有ならざる所の一は、静止し、また運動状態にあるにあらずや。
真に然るが如し。

然りと雖もしこれ運動状態にありとせば、必然として変化せざる可からず。何となれば物苟も運動する以上は、其物決して同一場所に在らずして、他の場所に在ればなり。

然り。

然らば一は運動するが故に変化するなり。

然り。

且つもし如何なる方法に於ても運動せずとせば、如何なる方法に於ても変化せざるなり。

然り。

然らば有ならざる一の運動する以上は、変化したるものにして、其運動せざる以上は、変化せざるにあらずや。

然り。

然らば有ならざる一は変化し、また変化せざるにあらずや。

有ならざる一は成来
し破滅し、成来せず
破滅せず

163-B

其然るや明らかなり。

かの変化したるものは、其前に然りしとは異なるものとなり、以前の状態を失い、
ここに破滅するなり。然るにかの変化せざるものは、存在に成來【come into】せず、ま
たは破壊せらるることもなし。

真に然り。

かの有ならざる一は変化するが故に、成來しましたに破滅す。また変化せざるが故に
成來せずまた破滅せざるなり。かくて有ならざる一は、成來しました破滅し、また成來
せず破滅もせざるにあらずや。

真に然り。

(四四) もし一有なら
ざる時は何物にも非
ず何處にも存せず
もし一夕らざる時は
如何

25 ここに於て吾等また始めに立帰り、これ等が或いは他の結果生ずるかを考究
せん。

請う君の言えるが如く為さん。

一もし有らずとせば、一に閑して果たして何事の生ずるかを吾等問わん。これ問題
なり。

然り。

「有らず」とは最も絶
対の意味於て存在の
不在なることを意味す

「有らず【is not】」なる語は其内に存在の不在なることを意味し、吾等はこれ等の言

語をそれに適用するにあらずや。

正に然り。

吾等が物有らずと言うは、其物一の方法に於ては有らずと雖も、他の方法に於ては
有りとの事を意味せるか、或いは絶対に、かの有らざる所のものは如何なる種類、如
何なる方法に於ても存在を享有【participate in being】せずとの事を意味せるか。

全く絶対に謂うなり。

然らばかの有らざる所のものは、有ること能わず、また如何なる方法に於ても存在
を享有し能わずと謂うべきか。

然り、能わざるなり。

在を有し、之を失い、
または之を取ること
能わず

成来す、或いは破滅するなる語は、存在を取得し【the assumption of being】、または之を失
喪することと【the loss of being】を意味するか。

然り他に非ず。

かの存在を享有せざる所のものは、存在を取得し、または之を失喪することを得る
か。

能わざるなり。

然らば、一は如何なる方法に於ても有らざるものなるが故に、また如何なる方法に於

D

ても存在を有し、之を失い、或いは之を取得すること能わざるか。

然り。

然らばかの有らざる所の一は、如何なる方法に於ても存在を享有せざるが故に、滅亡することなく、また成来することもあるらざるか。

然り、これ無し。

然らばこれ決して変化すること無し。何となればもし変化せしならんには、成来しまた破滅すべきればなり。

真に然り。

然りと雖ももしこれ変化なしとせば、また運動もあらざるなり。

然りこれ無し。

またこれ何處にも有ること無しとせば、また存立せり【stands】とも謂うこと能わざるなり。何となればかの存立せる所のものは、常に一点同一場所に存立せざる可からざればなり。

勿論なり。

然らばかの有らざる所の一は、決して静かに存立せず【never stands still ただ立つてゐるのではなく】、また決して運動せずと謂わざる可からず。

静立せるにも非ず

變化せず運動せず

E

(四五) 何等の賓辭
をも有し能わざ
何等の属性も条件も
有し得ず

164

然り何れにもあらざるなり。

また如何なる存在せる物も、之に属せしめ得べきものあるなし。もしこれ有り【there had been】とせば、これ存在を享有するにあらずや。

其然るや明らかなり。

小も大も同等も、これに属せしめ得ざるなり。

然り。

また同様及び異様【difference】も、それ自身或いは他の関係上、之に属せしめ得ざるか。然り得ざるなり。

それ然り、もし何物も之が属性たらしむる」と能わざとせば、他物の之に属性たらしむるものあるか。

有ること無し。

是故に他の諸物は、それとの関係上同様たり不同様たり、同一【same】たり異【different】たる」と能わざるにあらずや。
然り能わざるなり。

i Jowett 訳は "the moment it partook of anything which exists" 田中訳「何かあるものを分有すれば、
その時はむう」

164-B

また有たらざるものは、或物たり此物たり、またこれ、それ、或いは他に関係し、或いは属性たり、或いは過去たり、現在たり、或いは将来たること能わず。或いは知識、或いは意見、或いは知覚、或いは発表、或いは名称、その他何物たりとも苟も存 在せるものは、何等それと関係を有すること能わざるにあらずや。

然り能わず。

然らば有たらざる所の一は、如何なる種類の条件【condition】ⁱ をも之を有せざるか。然り、かくの如きは結論なるが如し。

(四六) 一の幽靈なお
付き纏う
一もし有らずとせば
他は如何となる。

【26】然りと雖もなお問わん。一、もし有らずとせば、他は果たして如何に成るべきぞ。請う、吾等之を決定せん。

然り、吾等それを決定せん。

他は必ずや有らざる可からず。もし其等にして、一、と同様に、有る」と無しとせば、吾等今、それに付て語ること能わざる可ければなり。

真に然り。

然りと雖も他に付て語ることは異なるものあることを合蓄す。かの『他』なる語と『異』なる語とは同意義の語にはあらざるか。

i 前出では "state"、Jowett 訳は "state or condition" 田中訳は「あり方（所持）」

C 然り同意養の語なり。

他は異を含む

他とは一と異なることを意味し得ず、故に他は互いに異なる

然り。

然らばもし他【others】なるものありとせば、ここに或物ありて、それよりも其等は異なるもの【other】なるべきか。

然り。

この事は如何なるべきぞ——もし「有ることなし」とせば、其等他は、「一と異なる」と無かる可ければなり。

異なるらざるべし。

然らば其等は互々に異なるべきなり。何となれば残余唯一の断定は、其等は無と異ならずと言うにあればなり。

真に然り。

(四七) 一たることとを欠如せる分子の概念其等の各個は一を有せずとも一たるの観あり

其等は其複数たり、单数たらざるに於て互々と異なれり。何となれば、もし「あらず」とせば、其等は单数たること能わず、ただ其等各分子【every particle】は数に於て無限たればなり。且つもし人ありて最小部分と見ゆる所のものを取るとも、此「なり」と見

i Jowett 訳は "each mass", 田中訳は「それらの集まりからできているかたまり」

えし所も直に消え去りて多となること、宛かも夢に於けるが如くにして、其最小たることより変化して、其分裂する始めの小部分に比較して甚だ大なるものと成るにあらずや。

真に然り。

もし他はこれ有り【if others are】、「はこれ無しとせば、かかる分子中に於て【in such particles】、他は互々と異なるにあらざるか。

正確に然り。

また多くの分子ありて、各分子は「の如き觀を呈するも、もし「なき時は、「たらざるにあらずや。

真に然り。

其等各個は仮令其実多なりとも、もし「たる如く觀ゆる時は、数は其等に属性たらしむるゝ【number can be predicated of them】を得るものの如し。

然り。

かくて其等の内に奇数あり、偶数あるべき如しと雖も、もし「なき時はこれ亦其实在を有せざるにあらずや。

i Jowett 譯は "Such masses of others" 田中訳は、他は「」のようなかたまりをなしながら」

然り。

ここに其等の内には、細小なるもの存するが如き観あり。然りと雖もこれなお、其内に含有せる所の多数の小部分に比較する時は、大且つ多【manifold】たるが如し。然り。

また各分子は多と小とに同等なるが如く想像せらるべし。何となれば此物、中に達せし如きこと無くして大より小に移ること能わざる如ければなり。かくて同等なりとの觀生ずべし。

然り。

また始、中、終を有せざるが故に、各別々の分子はなおそれ自身及び他との関係上定眼【^alimit 限界】を有するの観あり。

何故に然るか。

其理由たるや、人もし其等の内何れの一なりともかくの如く之を解する時は——始めより前に他【another】の始なるもの現れ、終の後に遺る所の他の終なるものあり、また中の中には一層真実なる多くの小なる中其内に有るべし。これ一あらざるが故に、一なる觀念其等の内の何れにも、之を得ること能わざるが故なり。

大に然り。

かくて一切の存在は、吾等如何に之を考えるものなりとも、小部分に分裂せざる可からざるなり。何となれば分子なるものは一なくして之を知らるべければなり。

然り。

遙かに隔てて他を見る時は一なる如しと雖も近づく時は多たり無限たるなり

165-C

かくの如きは不明確にまた遙かに隔てて見たる事にして、「なりと観ゆるなり。然りと雖も、一旦之に接近して、知力を鋭利にして之を観察する時は、甚だ单一たりし物は無限たるの觀を呈すべし。これ有らざる所の一を欠損せる【it is deprived of the one】が故なり。

最も確実なる言と謂う可し。

然らば、もし「以外の他【others】は存在するも、一の存在せざる時は、他の各個は無限の如し、有限の如く、「の如く多の如き觀なかる可からざるなり。

然り。

然らば其等は同様たり不同様たる觀なきか。

如何にして。

恰も絵画に於けるが如く、遙かに隔てて之を観る人在つては、物皆、一の如く、同なるも状態に、また同様なるが如し觀ゆるなり。

i Jowett 訳は "it is really devoid of one," 田中訳は、「一はあらぬものとしてそゝから取り除かれる」

然り。

D 然るに之に接近する時は、其等は多たり、また異なるれる如く見ゆるなり。また其異觀あるが故に、其等自身とは種数に於て異なり、また不同様なるにあらずや。
然り。

E かくて諸分子【particles】は、其等自身及び相互に同様たり、また不同様たるの觀あらざる可からざるなり。
然り。

また其等は互いに同一たり而も別異たらざる可からざるなり。且つ其等は素より別離せりと雖も、其等自身とは接觸し有らゆる種類の運動、有らゆる種類の静止を有し、成來し【becoming】、破滅し【being destroyed】、如何なる状態にもあることなく、また凡てかくの如き状態にあるべく、もし一はこれ無くして多はこれありとせば凡てかくの如き事物は容易にこれを枚挙するを得べきにあらずや。

然り。

(四八) 一もし無くば
他は一に非ず故に多
に非ず

【27】今一度吾等始めに立帰りて問わん、もし一有ること無く、一の他。ありとする時は結果如何と。
吾等それを問題と為さん。

もし一なくして他あらば如何。他は
非ず故に多には

第一 [In the first place] 他は一にあらざるべし。
然り。

または多にもあらざるべし。何となれば、他【they】もし多なりしならんには、一は其等の内に包有されざる可からざればなり。然りと雖も其等の内の何れも、一に非ずとせば、其等の凡ては無たるべく、是故に他【they】は多にあらざるなり。

真に然り。

もし他中に、一有ること無しとせば、他是多にも非ず、一にもあらざるべし。

然り。

また一とも多とも觀えざるべし。

何故に觀えざる。

もし他是「一とも多とも見えざる時は多
とも見えざる意味には
其等は或る意味には
於いて非存在を享
有せざる可からず
と雖も、此場合は
然らず

其理由たるや、他は如何なる種類の非存在とも、交通上如何なる種類も、方法も之を有せず、また何物なりとも、有らざる所の物は、如何なる他にも連絡すること能わざるが故なり。これかの有らざる所のものは、部分を有せざればなり。
真に然り。

i Jowett 訳は "Well," 田中訳は、「それなら」

ii "no sort or manner or way of communion with ...," Jowett 訳は "no communion in any way whatever ..." 田中訳は「いかなる仕方いかなる意味においても、けつしていかなる共同関係をもつてはなく」

または他に関聯して、非存在に就いての意見も、または何等の外觀もあることなく、または非存在は如何なる方法に於ても、他に属性たることあらざればなり。

然り。

然らばもし「なし」とせば、「として、または多」としての如何なる他の概念も有ること無けん。何となれば「なくして他【many 多】」を概念することを能わざればなり。

能わざるなり。

然らばもし「なし」とせば、また他も有ること無く、また「とも他【many 多】」とも概念すること能わざるにあらずや。

然るが如し。

また同様とも異様【unlike】とも思うこと能わざるべし。

然り。

また同とも、異【different】とも、接触とも、分離とも、または吾等が然るべく觀ゆるとして枚挙する所の其等の状態の何れとも思うこと能わざるべく——もし「なし」とせば、他はこれ等の内の何れにも非ず、また其如く觀ゆることも有らざるにあらずや。

真に然り。

ここに於て吾等一言以て議論を総括して、眞実に言わば——もし「有らず」とせば、

其等は同様にも不同
様にも、同にも異に
も非ず

C

B

何物も有ることなしと言わん。

確かに然り。

吾等かく言い、なおまた進みて、真理の如く思われる所を断定せば——「は存すとするとも、また存せずとするとも、『及び他は、其等自身及び相互の関係上、凡て其等は有らゆる方法に於て、有りまた無し、在る如く觀え、また無き如く觀ゆるなりと謂うにあり。

真に然り。【*diaphorata* 田中訳「それこそ眞実」の上ないとです】

カナ表記置き換え：ソークラテース→ソクラテス、アリストテレース→アリストテレス、ゼーノーン→ゼノン、バルメニデース→バルメニデス、プラトーン→プラトン、アテナイ→アテナイ

底本：『プラトーン全集』第九卷（富山書房 1925 訂正七版）

作成者：石井彰文

作成日：2026.2.3